

藝研究會長雙龍軒先生講述

神  
秘  
開  
放  
變  
化  
自  
由  
忍  
術  
魔  
法  
秘  
傳

神國武藝研究會發行

Auteur : Sôryûken ( 双龍軒 ) sensei ( 先生 )  
Titre en langue originale : 忍術 魔法 秘伝 : 神秘 開放 変化 自由  
Titre en japonais : « Ninjutsu mahô hiden : shinpi kaihô henge jiyû »  
Année : 1917

Fascicule sur le ninjutsu d'une centaine de pages.

# 目次

▲ 忍術とはシノビの術

▲ 鼠小僧と忍術の修業

▲ 石川五右衛門の忍術

▲ 武士道の精華と忍術

▲ 山鹿流の兵學と忍術

▲ 大石良雄忍術の奥傳

▲ 乃木大將の好きな忍術

▲ 忍術の極意と日本魂

▲ 由井正雪の魔法練習

▲ 忍術に悟入する法則

▲ 弘法大師は忍術の名人

▲忍術の濫觴及其歴史……………

四

▲大聖人の忍術使ひ……………

四

▲忍術大名人齋樹菩薩……………

五

▲釋迦の難行苦行と忍術……………

五

▲瓦礫を金にする術……………

五

▲身を虚空に繋げる修練……………

五

▲傳教大師と忍術の話……………

五

▲行基菩薩の忍術修業……………

五

▲印度の隱身術と忍術の話……………

五

▲菩薩の忍術と鳥の翅……………

六

▲大地を水にする幻術……………

六

▲鼠小僧の水遁の術……………

七

▲今泉霧太郎の忍術の奥傳……………

七

- ▲鼠形變と稱する忍術の種……………八
- ▲修驗者のする火渡りの術……………九
- ▲劍の刃渡りの忍術と魔術……………九
- ▲五行を利用する五遁の術……………九
- ▲鼠を使用する忍術者……………一〇
- ▲伊賀流芥川流甲賀流の話……………一一
- ▲忍術開祖百々地三太夫……………一二
- ▲猛練習と忍術の發達……………一二
- ▲太閤の眼の前で忍術實驗……………一二
- ▲忍術は夜陰に乗ずるもの……………一三
- ▲伊賀流太刀取りの秘術……………一四
- ▲忍術は父祖相傳である……………一六
- ▲忍術の科學的研究の話……………一七

▲ 轉氣法と忍術の極意	一七
▲ 虚に乗ずる錯覺の利用	一八
▲ 荒木又右衛門の轉氣法	一八
▲ 柳生十兵衛劍道の極意	一九
▲ 伊東一刀齋の轉氣術	二一
▲ 忍術と精神の練磨	二二
▲ 整息術は忍術の初歩	二六
▲ 虚心平氣の工夫鍛練	二六
▲ 食はずに飢へぬ秘訣	二六
▲ 眠らずに疲れぬ方術	二七
▲ 雲に乗つて飛ぶ忍術	二七
▲ ナポレオンの忍術研究	二八
▲ カール大王の實用忍術	二八

▲忍術使ひの駢け足振り	三五
▲大坊主傳達の快足術	三六
▲甲州流の軍學の駢け足	三七
▲飛行的駢け足の祕傳	三八
▲マラソン競争必勝の話	三九
▲鴨や鷗を手摺みに出来る	四一
▲水中忍術の方術と祕傳	四二
▲水中隱身術の祕密奧傳	四三
▲屋根で組打する祕訣	四五
▲忍術家の高飛び口傳	四六
▲忍術上必要の機械研究	四八
▲五寸釘寅吉機械的忍術	四九
▲犢鼻褌で煉化塀を飛越す	四九

- ▲忍術使ひの羽織の利用……………五二
- ▲光線應用の火遁の忍術……………五三
- ▲天竺徳兵衛の墓の術……………五五
- ▲白縫蜘蛛使ひの術……………五五
- ▲刃物入らずの殺人術……………五六
- ▲蝶々一匹て人を殺した話……………五八
- ▲女を殺し亦た生かす術……………六〇
- ▲氣合術の極意で戦勝する……………六一
- ▲廻狐術の名人山井正雪……………六三
- ▲神通力と其の修業法……………六四
- ▲弘法大師の廻狐術……………六八
- ▲精神的魔法使ひの話……………六九
- ▲慕仙人の練磨的大魔術……………七〇

▲熱湯へ手を入れる法……………七〇

▲焼火箸を扱く忍術……………七〇

▲劍の刃を渡る大魔術……………七一

▲動物を自由に驅使する法……………七五

▲飛鳥を暫らく止める法……………七六

▲スバルタの精神的忍術……………八一

▲魔術の世界的歴史譚……………八七

▲英雄の籠罩術と大魔術……………九一

# 目次終

## 序 文

世界は戰亂の巷になつてゐる、佛獨の國境から白耳義に亘り數百哩の戰線は宛として三層七層の土壘が築かれて、双方ともに萬里の長城を以て相對してゐる觀がある、要するに機械の戰爭にして、腕の戰爭ではない、兵糧攻め、金錢攻め、既に一千萬人の人を殺したと云つても、其れは場面が世界的であるからのことで、我が明治十年の西南戰爭に比して見ると、比較的數字の上では、寧ろ問題にならぬほど緩漫の戰爭である。由來西洋でも支那でも、戰爭や喧嘩をする時には、大を以て小を負かすと云ふ流義ばかりで、其所に何等の破天荒の快事もない、併し僅かに數千人を以て、波斯十萬の大軍を粉

碎したと云ふ、希臘の昔話もないではないが、何れにしても我邦のやうに絶へず小を以て大に勝つと云ふ歴史の續いてゐるのはない。

是れ蓋し偶然の事ではなくして、我邦では數百年來、忍術や魔法と云ふ如き、個體的修練の結果、肉體でも精神でも鍛へられてゐた遺傳があつた所爲である、岩見重太郎、宮本無三四、荒木又右衛門、由井正雪、塚原卜傳、伊東一刀齋、其他の多くの魔法使ひの物語や、劍士の奇蹟に類する奮闘努力の講談は、實に日本帝國の國寶である、之れあるが爲に我々日本人は、いつの場合でも最後の肉弾となつて奇勝を占むる確信を有してゐる、忍術は忍耐術である、魔法は精神の練磨て

ある、二者相待つて、謂ゆる日本魂を鍛へあげる根本的素質となつてゐるものである。

大正六年初秋

双龍軒主人識

# 歌名意極道劍

切り結ぶ刃の下は地獄なる

身を捨てこそ浮ぶ瀬もあれ

雨あられ雪や氷とへだつれど

落つれば同じ谷川の水

勝つことを何と答へん言の葉の

墨繪にかきし松風の音

打ち寄する浪の受太刀満汐に

さし心得て飛ぶ千鳥かな

劍術を何と答へん岩間もる

露のしづくにうつる月影

## 慣習と術忍

心理學に精神活動の經濟と云ふことがある、凡ての精神活動は屢々反復されて習慣的となるに従つて確實にして錯誤なきやうになることは、誰れでも能く知るところである、例へば今、Zなる目的を達する爲に、未だ習慣の出来ぬ中は、A、B、C、D、E、F、G、と段々に精神活動を経て行くのだが、習慣になつてみると、唯だAの一活動を遂げた丈けにて、最後のZまでに到着し得るものである、歌かるたの競争に、非常に敏腕の人のあるのは、要するに慣れ切つて仕舞つてゐるからである、慣れると云ふことは、取りも直さず忍術修業の一つの極意なりと心得べきことである。

神祕開放  
變化自在

# 忍術魔法術

卽席魔法使ひになれる祕傳

双龍軒主人講述

忍術とは  
シノビの  
術である

鼠小僧と  
忍術の修  
業  
石川五右  
衛門の忍  
術

▲我邦では昔から忍術と云ふもの

▲があるが之れを要するにシノビ

▲の術に他ならぬものである

併しシノビの術と言つても、石川五右衛門や鼠小僧のやうな犯罪をする目的で發達したのではない、茲に稱してシノビの術と云ふのは、言葉を代へて言つて見ると、徹頭徹尾心身を練磨すると言ふ意味に方つてゐるのである、去れば忍術とは、其の實は堪へ忍ぶ、何でも辛抱する、辛抱して練磨する、然うすると人間の身體、殊に未だ二十歳以下の人であると、其の練磨の功は實に意外

の境にまで發達するものである、普通の人から之れを見ると、ドウしてアンナに不思議な眞似が出来るかと思嘆極まるやうになれるものである。

▲武士道の精華として日本の守護

▲神になつた乃木大將は近代に於

▲ける忍術の大名であつたのだ

乃木大將の忍術の極意は、日本第一の兵學家山鹿甚五左衛門先生の秘傳にして、山鹿先生から大石内藏之助に傳へ、大石内藏之助は實に此の忍術の極意を極端まで發揮して、然うして成功した結果、不朽の美名を千載に際して留めてゐるのである、世間の人の能く言ふことに、なる堪忍は誰れもする、ならぬ堪忍するが堪忍と云ふ道歌があるが、此の意味は人から恥をかゝされても、唯だ徒づらに指を加へて引込んでゐると云ふ譯ではない、大石内藏之助や、乃木大將のやうに、人の出来ない辛抱して、一代に死して百代に生きると云ふ遣り方をす

るのが聴かに忍術の目的とするところである、我邦は昔から此の忍術と云ふところが發達してゐた爲に、其れが一種の社會的暗示となり、謂ゆる日本魂なるものが鍛へ上げられて來たのである、併し凡ての物には一利一害があるのは免れない、正宗の銘刀を狂者に持たせたやうに、忍術の發達と云ふことが害になつて、昔から之れを利用して大盜賊を働いたものも澤山ある。

▲驚くべき謀反を企てた由井正雪

▲のやうな豪傑もあつたが併し泥

▲棒となつても忍術の達人なら

大體に於て卑しい心のないもので、單に義賊として世の中に敬慕される許りではない、鼠小僧の墓は、實に四十七士の義士の墓と相對して、今でも香華の絶へ間のないのは不思議の沙汰ではないか、之れ彼は深く忍術と云ふ事に悟入してゐたからの結果である、更に溯つて忍術の歴史を調べて見ると、世界に於

ける偉人傑士は悉く此の術を體得してゐたに違ひないと判つてゐる、東洋では釋迦のやうな大聖人でも、最初の出發點、即ち如何にして我が此の佛教を宣布しやうと考へた時に、ドウしても此の術の力を借りねばならぬと決心したのであつた、されば釋迦の蹟を次いで、一代の菩薩となつた龍樹其の人の傳記を見ると、斯う言ふことが書てある、龍樹は南天竺の人婆羅門の種であるが、聰明穎智、夙に忍術を能くしたものである、彼は此の術を以て凡ゆる人生の快樂を極めんと欲し、一日志しを同じくする他の忍術者と共に王城に忍び込み、隱身を以て意の儘に宮女を姦し、面白可笑く數月の間を暮せしが、一朝城内の防禦が非常に嚴重になつてゐたので、終に其の身を亡ぼされんとする危険に逢ひ爾來翻然として忍術を悪用することを止めて、然うして立派な尊者となつたのである、乃て今、龍樹菩薩の遺された大論と云ふ佛典を見ると、口を極めて釋迦の忍術の巧みてあつたことを賞讃してゐる。

▲其れで見ると釋迦に忍術のある

忍術大名  
薩人龍樹善

傳教大師  
と妖術の  
話

釋迦の難  
行苦行と  
忍術

瓦礫を金  
にする術

身を虚空  
にかける  
修練

印度の隱  
身術と忍  
術の話

▲のは鳥に翹ありて高翔し得ると

▲同じやうなものだと言つて

心を虚空に繋げ、鹿重の色相を滅じ、常に空輕の相を取つて精進心を發揮し智慧を以て心の力が能く此の身を擧げ得るや否やを籌量し、進んでは能く諸物を變化せしめて、地を水と作し、水を地と作し、風を火と作し、火を風と作し諸物をして悉く轉易せしめ、金を瓦礫と作し、瓦礫を金と作さしめた力を有つてゐたとある、而かもかゝる忍術は畢竟するに、釋迦が難行苦行して得たところである、之れに依つて考へて見ると、我が行基菩薩でも、傳教大師でも、弘法大師でも皆な忍術の體得に依つて布教されたものに極つてゐる、併しながら降つて此の忍術が武道の方に用ひられるに至つた歴史を穿鑿して見ると、之れ亦た面白い變遷を有つてゐる、今其の道に詳しい劍客者の話を聞けば、古來よりの謂ゆる武藝十八番と稱せられる藝術の中で、特殊の三術と言はれて最もも祕密に傳へられて來たものは寔かに忍術に相違ない、けれども忍術なるもの

は、劍術、柔道、馬術、銃砲の術のやうに、表面に立つてゐた藝術とは思はれないで。

▲ 暗々裡の裏面に於て神出鬼没を

▲ 逞くしてゐた術であつたのである

▲ から餘りに尊ばれた術でない

併し其れは蔭に廻つて秘密に策を弄すると云ふを避け、我が武士道の精華として、武士氣質の當然であると思つた風格の爲に、幾分か卑限のことのやうに感じられた所爲である、遂に其の結果から、忍術は極めて特殊な範圍に限られた人々の間に、専修される次第となつて、之れが修得者、俗に言ふところの忍術使ひと呼ばれるものは、多くは甚だ身分の軽いものであつた、其れと共に一方には武士以外にも、例の鼠小僧等は必らず忍術に巧みなものであつて、之れを盗賊する上に應用したものである、然らば鼠小僧は如何なるところから忍術

を習ひ得たかと云ふのに、彼は生れつき機智に富み、僅か十五歳か十六歳かの時にすら、岡ツ引に追はれて永代橋の上から隅田川に飛び込んで、水を潜つて逃げ去つた位の小僧であつたのであるが、併し何人かの系統のある傳授を受けたものでない限りは、後世に名を遺すやうな名人とは成り得なかつたのである。

▲鼠小僧は實に武藝の達人にして

▲忍術の名手であつた今泉霧太郎

▲と云ふ先生から

立派な忍術の極意を授かつてゐたのである、此のことは鼠小僧の實録を讀むとチャンと書いてある、當時其の霧太郎と云ふ先生は彼に對して、イヤ盜賊にしても貴様の了簡は面白い、昔し我が朝の大盜賊、熊坂長範と云ふものは、生涯盜賊を働らいてゐたにも拘らず、九十餘歳の長命を保ち、遂に源の義經の手に掛つて美濃國は青墓と云ふところて斬り棄てられた、其れから又、漢土にあ

つた盜賊の張本、其の名も盜跖と稱するものは、不敵な大惡人でありながら、之れは亦た長壽を保つて壘の上で大往生を遂げてゐる、されば太史公と云ふ當時の大學者が、盜跖は日に不辜を殺し、人の肉を膾すにし、暴戾恣睢、黨を聚むること數千人、天下に横行し、竟に壽を以て終はる、是れ何の徳に従つたものであるか、天道は是であるか非であるかと嘆息してゐるではないか、けれど是等の惡人どもでも畢竟するに何かの善根を施してゐたものに違ひないと考へられる、思ふに貴様も斯ウなつては逆も改心は出來まい、賊なら賊でも仕方がないから、吾輩は最早其の方とは生涯絶交を致すに依り、此の後若し何れの所で邂逅つても、決して言葉を換して呉れるナ、其の代りに平素から其の方の望んでゐる法術は授けて遣はすと言つて。

▲ 即ち鼠形變と稱する術を授けて

▲ 遣つたのであつた此の鼠形變と

▲ 云ふ忍術は

鼠形變の  
忍術  
修驗者の  
する火渡  
りの術

劍の刃渡  
りの妖術  
と忍術  
五行を利  
用する五  
遁の術

隱形五遁の中の一つで、五行即ち木火土金水を利用して自分の形を變ずる忍術であつて、例へば水中に隠れても溺れず、火に入るも焼けず、木に依つて姿を隠し、或は金屬に依つて其の身を隠し、土に隠れて姿を變ずると云ふやうなもの、之れを夫の一代の名人とも言はれた講釋師、俗に泥棒伯圓とまで評判された講釋師でも、其の實例を擧げてお話すると云つて、右大將頼朝公が治承四年の八月に石橋山の伏木隠れと云ふのは、此の木に依つて形を隠したものである、金に依つて姿を變ずると云ふのは、山伏のする劍の刃渡り杯と云ふ術である、其れから火に依つて形を隠す火遁の術と云ふのは、八犬傳の中にはある犬山道節が圓塚山の猛火の中で姿を隠すの類である、亦た修驗者の中には火渡りの術と云ふこともある杯と云つてゐるが、實際は甚だしく間違つてゐる講釋であると云つて可い、五行を利用する五遁の術と云ふのは、素と之れ易學の中から割出されたもので、鼠形變と云ふのは寔かに土遁に屬した忍術のことを指したのである、要するに家の棟を歩行いたり、梁の上を歩行いたりするの

てはなくて、却つて大塊を利用し、土と云ふものを利用するのが本體にして、夫の鼠を利用するやうなことはホンの附屬した術であるのだ。

▲忍術使ひの方で云ふ鼠の術と云

▲ふのは別に人間が鼠に化け得ら

▲れる譯ではないのである

併しドウかすると忍術者は鼠を使用せねばならぬ場合もあるから、其れが詭傳されたものである、一體鼠と云ふ動物は、住み馴れないところへ行くと必ず狼狽するものである、即ち忍術者は此の鼠の狼狽する作用を利用して見るとがある、かゝる場合には普通の法則では、大概は二匹の鼠を持つて行つて、室内へ夜中に忍び込む場合に、先づ此の中の一匹の鼠を放して見るのだ、然うすると鼠は甚だ狼狽して室中を駆けまはる、グツスリ寝込んでゐるものでも、此の物音に目を覺まして見ると鼠である、何だ鼠かと云ふので安心する、斯ッ

なるねずみと鼠ねずみと云いふ觀念くわんねんが頭あたまの中なかに入はいつてゐるので、少すこし位ぐらゐガタスタしても鼠ねずみと思おもふものである、乃そこて更さらに今いま一匹いつびきを放はなして見みる、又またもや室内しつぷなを駈かけまはる、けれども既すでに鼠ねずみであると思おもつてゐるので、ヨシ再びふたし之これを見みても大おほいに安あん心しんして寢ね込んで了しまひ、今こんど度は少すこし位ぐらゐの足音あしおとがしても忍しのびの曲者くせものであると思おもはぬやうになるものである。

▲大體だいたい此この忍術にんじゆつが武道ぶどうの方ほうに用もちゐ

▲▲られるやうになつてから三つの

▲流儀りうぎに分わかれて發達てつたつしてゐるが

伊賀流  
芥川流  
甲賀流

其それは伊賀流いがりうと芥川流あきたがはりうと甲賀流かゑりうとの三派さんぱであつて、各自かくじに獨特どくたくの長所ちやうじよを有もつてゐるとは云いふものゝ、大體だいたいに於おいては同じおなじやうな目的もくこきの下もとに發達はつたつしたのであるから、格別かくべつの變かはりはないものである、其そのの中なかで最もつとも世よに聞きへてゐるのは伊賀流いがりうであるが、此この忍術にんじゆつの開祖かいそは百々地もももぢ三太夫さんだいふと言いひ、其そのの幼名えうめいを三吉さんきちと呼よび、

全然山の奥で生長したものである、然うして九十六歳の壽を保つて致してゐるところを見ると、短軀精悍の小兵ながら、餘程壯健の男であつたに違ひない、然うして彼は幼少の頃には山の奥で猿を友としてゐたものと云ふから、何のことはない淺草公園の江川の球乗りでやるブランコの藝や、凡ての輕業のやうな眞似でも、現今の器械體操をやらしても、優に第一流の名人と云はれる位の素質を有つてゐた男に違ひない、従つて百々地の忍術は猛練習をして稽古すれば誰れにも出来る藝であると信じられたのは無理のない話である、彼は太閤を以て聘せられたのを悉く辭して了ひ、慶長の末年頃から、伊賀の國の名張と云ふところに止つて、町道場を開いて忍術指南を以て一生を了つた人である。

▲此の忍術伊賀流の開祖百々地三

▲太夫の傳記に就ては頗る面白い

▲逸話に富んでゐるが其の中で

豊臣秀吉が朝鮮征伐の時に、大阪から指揮をしては手ぬるいと云ふので、肥前の名護屋へ本陣を進めてゐたのは誰れでも知つてゐる通りであるが、當時彼れは秀吉のお氣に入りてある曾呂利新左衛門と共に、秀吉旗下の武士となつてゐたのであつたが、或る日のこと、秀吉が退屈しのぎに、百々地三太夫を召し出して、何か多勢の眼の前に於て、極めて巧妙なる忍術の極意をやつて見ろと命じられたことがあつた相である、然るに三太夫は直にお受けして、凡て忍術は夜陰に乗じて試むる業なれば、今晚此の陣中の大廣間に於てお試み相成たしと言上して、對手として曾呂利新左衛門に秀吉の御佩刀を確かり握らせてゐて其れを三太夫が少しも手を掛けずに奪ひ取つて御覽に入れると云ふので、秀吉も頗る興味を感じられ、コレ三太夫、首尾能く此の太刀を取つた時には、之れは予が年來秘藏のもので、日本に唯だ一つしかない微塵丸と號する名刀ではあるが聡と其の方に興へるぞと仰せられたので。

▲三太夫は甚だ勇み立つてそれ

▲支度を調へて日の暮るゝを待

▲ち受けて廣間へ行つて見ると

蒲生氏郷を筆頭に北國の諸大名が綺羅星のやうに居並んでゐる、中央の一段高いところに秀吉殿下が御出座あり、其の少し前の側のところには、例の微塵丸を駈と押へて曾呂利新左衛門がゐる、更に亦た其の側には、之れも甲賀流の忍術の開祖である戸澤山城守が控へてゐる、而して燈火は萬燈と點ぜられて煌々輝いてゐる、諸大名方一同は百々地三太夫は如何なる手段を以て、此の新左の持つてゐる、太刀を取るのであるかと、眼ばたきもせず眺めてゐると、何れからともなく一匹の鼠が現はれて來た、之れを見た秀吉はハ、ア三太夫め、古臭い鼠の手を用ひるワイと思つて見てゐると、いつの間にか鼠が二匹となり三匹となり、十匹となり二十匹となり、遂には數百匹となつて、座敷中を駆けあゝるき、果ては其の鼠が居並ぶ諸大名の衣へ上り、肩の邊より頭の上へ飛びあがると云ふ光景となつて來たので、アチラでもコチラでも、扇子を以て頭上の鼠

を追ひ拂つてゐる、スルト新左衛門の頭上へは特に數十匹の鼠が飛びあがつたので、ハット驚く途端に太刀を持つてゐた手が一寸放れると、不思議なことに其の太刀が矢を射るやうに何れへか飛んで行つて了つたのである。

▲乃で秀吉公は非常に感服なされ

▲て約束通りに太刀を與へた上に

▲更に一千石の祿を増した

然るに其の跡で段々當時の種明しを聞いて見ると、鼠を放したのは僅かに十匹にして、其の他は木の葉を飛ばせて驚かしたので、新左が驚いてゐる間に太刀の鑑へ魚を釣るてぐすて緇つた糸を引かけ、ツイと引張つて取つて了つたのだと云ふことである、今日と違つて幾ら萬燈を點しても、蠟燭や行燈の火では手早くやれば斯のやうなことは出来たであらうと思はれる、此の百々地三太夫は、前にも言つた通り末年には伊賀の國の名張と云ふところで町道場を開いて

ゐた爲に、伊賀の城主であつた藤堂家は長く此の忍術を以て名高くなつてゐたものであつた、何にしても文化文政年間の頃までは伊賀の城下にはお忍明と云ふ長家町さへ出来てゐた位であつて、多數の忍術使ひが父祖相傳なりと云ふ看板で之れを修業して、其の流儀を傳へ來つたのである、然うして忍術は其の研究法と共に、最とも祕密を守られてゐたものであつたのだから、容易に其の練磨の祕法を他人に洩らすやうなことはせず、従つて忍術に關する記録の類は、若し此の相傳者のない場合には大概焼き棄て、了つたものである、されば今日にまで傳はつてゐる忍術の記録は、僅かに二三の家に傳はつてゐる外には、決して他で見ることに出来ない珍品になつてゐるのである。

▲忍術の名人であつた百々地三太

▲夫が太閤殿下の御前に於て曾呂

▲利の持つてゐた太刀を取りしは

これは近頃になつて其の方法を學問的に研究されて、心理學の方から言へば轉氣法と云ふ術を使つたことに方つてゐる、轉氣法と云ふのは、或る一定の方  
 向例へば秀吉の面前に居並んでゐた諸大名や曾呂利新左衛門でも、如何にして  
 忍術使ひが、此の太刀を奪ひ取りに来るだらうと思つて、一同のもの、精神活  
 動は悉く其の方向に許り注がれてゐた時に、一匹の鼠が出て來た、更に亦た二  
 三匹の鼠が出て來た、斯くして段々に鼠の數が殖へると夜のことではあるし、  
 之れは必らずモツと澤山の鼠が出るに違ひないと豫期してゐたのであるから、  
 最早木の葉をバラ／＼蒔いても一時は其の木の葉が鼠に見ゆるやうになるもの  
 である、其の虚に乗じていつの間にか太刀の鐙へ糸をつけたので、かゝること  
 を轉氣法と云ふのである。

▲忍術は學理の上から研究するこ

▲とも出来るが亦た大いに氣轉を

▲利かすと云ふ所に秘密がある

虚に乗ず  
る錯覺の  
利用

荒木又右  
衛門の轉  
氣法

有名なる劍客者として、荒木の前に荒木なし、荒木の後に荒木なしとまで謳はれた又右衛門が未だ幼少の頃、大和の國正木坂の柳生十兵衛先生の道場に於て、此の轉氣法を利用して大勝利を得たと云ふ逸話が遺つてゐる、當時十兵衛先生は、一匹の大猿を愛されて、此の猿に根よく劍術を教へ込んだから、生來より身輕の動物だけに、木劍を持つて人の頭を打つたり、足を拂つたりするところが如何にも機敏になつて、初學の劍術使ひは逆も此の猿に敵せぬ位に上達してゐた相である、されば十兵衛先生が自身で教ゆる門弟は、先づ此の猿と仕合をして勝つたもの計りと定めて、其れ以下のものに對しては、凡て代稽古の先生に依つて教授されることになつてゐたが、幼少の又右衛門未だ其の頃は丑之助と呼ばれてゐた相であつたが、ドウかして此の猿に勝たうとしたが、却々に力が及ばない、然るに或る日のこと、丑之助は意氣揚々として十兵衛先生に向ひ、今日こそは猿を負して御覽に入れると大言を吐いて、先生の目の前で猿と仕合をした時に。

▲今日は不思議にも猿の太刀筋が

▲亂れるので十兵衛先生も妙に思

▲つて氣合の聲をかける

猿は十兵衛先生の聲を聞くと、其の時だけは太刀がキチンと立ち直る、併し暫くすると又亂れて来る、其の中に丑之助が一本打込んで猿の頭をボンと打つた拍子に、丑之助の木劍を握つてゐた手からゴロリと一つ赤い柿が轉げ落ると猿は逸早く之れを拾つて一目散に逃げて行つたと云ふことがある、之れを見て十兵衛先生は丑之助の機智に感じたと云ふことで、劍道の極意も實にかゝる所に存するものであると賞讃されたとあるが、之等は全然轉氣法の活用の方であるものである、かゝる事は武道の方に許り活用されるとは限らない、或る病院の出来ごとであるが、賄方の料理番が俄に發狂して、大きな出刃庖丁を振り廻して誰でも皆殺しにすると騒ぎ出し、院長の書齋へと飛び込んだことがある

然るに其の院長は振り反つて此の料理番を見て、極めて平氣な顔で、何だお前の顔は、額への中央へ紙幣を貼つてゐるぢやアないかと云つて机にあつた鏡を出して遣つた、スルト此の料理番がポカンとしてハテナと云つて、其の鏡を見た透間に、院長は遠く逃げ去つて危いところを助かつたと云ふ話もあるが、之等も此の轉氣法の活用に他ならない。

▲一刀流の開祖として有名なる劍

▲土伊東一刀齋は頗る此の術を驅

▲使した名人であつた。

一刀流を皆傳されて、天晴れの武藝者となつた神子上典膳は、伊東一刀齋の許に足を留めて、毎日薪水の業を取り、又は老人の足腰を叩き、其の合間に武藝の奥儀を訊ねると、否々武藝の奥儀は一朝一夕には知れ難し、自然に會得を致す場合もあるべし、唯だ怠らぬと云ふことを以て第一と致す、手を以て教へ

ずと雖も、凡て武藝者の心持は無暗に人を打つべきにあらず、打たれざることに専一である、然る故に油斷を大敵と云ふ、今より汝、少しでも油斷を致さば予は必らず汝を打つべし、努々油斷すべからずと云つて、典膳が油斷あれば、一刀齋は手當り次第にビシヤリと打つ、スルト典膳が恐れ入りましたと云ふ、乃て先生は、兼々申附けて置いたてはないか、何故に油斷を致す、師弟の間柄なれば生命には及ばず、萬一敵であつたらば、汝が生命は立所に失くなつてゐる、以來はキツト心を附けよと云はれたので、典膳之れより更に油斷を致さず一刀齋は又、典膳が水を汲みて、谷間から上つてくる所を待ち受けてビシヤリスルト亦た典膳が恐れ入りましたと云ふ、之れ決して油斷致すなど申すに如何致したかと叱られる、今度は典膳が便所に入り、用便をたして出やうとするところをビシヤリ、恐れ入りました、或は寢てゐるところをビシヤリ、之には少し典膳も驚いて、先生に伺ひますが寢てゐるところを御打ちなさるは、作法にもない少々御手荒いことかと存じますと云ふと、黙れ、汝を打たんと考へてゐ

る敵てきであれば、寝ねてゐると申まをして何なんぞ猶豫ゆうよすべき、之これが武藝ぶげいの極意ごくいであるぞ寝ねたからと申まをして、心こころさへ縮しめてゐれば、人ひとの忍しのんで來くるのに眼めを覺ささぬ法ほうやある、乃こゝて亦また典膳てんぜんは恐おそれ入りましたと云いふ、サア斯かウなると、寢食しんじよくさへ安心あんしんしては出で來きない、然しかるに或あるる日ひのこと、食しょくじ事を致いたしてゐるところへ一刀齋たうさいが進すすみ寄よるから、サテはと覺悟かくごしてゐるところへピシヤリと來きたから、ハツと體たいをかはずことが出で來きたので、一刀齋たうさいも大おほいに喜よろこんで、之これは追々おひくの上達じやうたつ、夫をれてこそあれ我われも教をしへ甲斐がひありと申まをすもの、ドウか其その心得こころえを忘わすれて呉くれるなと云いはれたので、典膳てんぜんは嬉うれしくて堪たまらず、御褒おほめに預あづかり恐おそれ入りましたと頭かしらを下さげるところをピシヤリとやつたと云いふ話わがある。

▲何なんにしても忍術にんじゆつでも劍術けんじゆつでも共とも

▲に之これを練習れんしゆする第一だいいち歩はは忍耐にんたい

▲と機智きちとの修養しゆやうに他ほかならない

忍術の傳書に曰く、忍術の忍の字は忍び込むと云ふ筋とは少しく違つてゐる要するに耐忍の忍であるとなつた、之れが即ち忍術を修業するもの、第一に心掛くべきことである、此の耐忍の忍と云ふことを修むるには、軀幹の練習するよりも先づ以て精神の練磨をするのが肝腎である、實に此の精神の練磨こそ忍術習得の第一歩であると同時に、暇かに之れを以て極意とすべきものであるのだ、一體に昔の人、殊に武士道の盛んであつた時代には、非常に精神を練磨したものである、即ち意志を強固にして詰らぬ感情を抑へつける、故に主君や父兄に對して盡す忠孝の情や、朋友等に對する情に至つては、實に熱烈であつたが、併し悲哀や苦痛ある場合に處しては、其の感情を抑制して、容易に之を顔色や體度に表さない、然るに西洋人や支那人を見ると、彼等は外科的治療を受ける爲に、病院の手術臺に上つて、堂々たる男子でありながら、ワイ／＼泣いてゐる相である、我が邦の武士道に養成された人物になると、かゝる場合に處しても平氣なものである、昔しの豪傑北條早雲の如きは、片腕を切開させつゝ、

悠悠々として碁を圍んでゐたと云ふ逸話が遺つてゐる、之れを日清戦争や日露戦争の時に就て見ても、支那人や露西亞人の捕虜は、メソク泣いてゐたが、我が邦の兵士は縦ひ敵に捕はれやうが毅然として泣くことなどはせぬ。

▲斯のやうに精神を練磨すること

▲が何流の忍術でも必らず其の極

▲意になつてゐるのである

夫の劇場でやることは、多くは作り話であるとは言ふものゝ、先代萩の政岡杯は我が最愛の兒が死ぬのを見ながら、人の前では更に動じない、其の意志の強くて感情を抑壓する力は實に、驚くべきものがあつた、一體に武士道に育つた女は、許嫁の良人が死んでも固く空聞を守つて、如何なる才子や美男が何と云ひ寄ればとて決して其の情に絆されない、之れ意志が強固にして、感情を抑制する力が練磨されてゐるからである、此の風は所謂武士の仲間許りあつ

たのではなく、學者の方面にもあつて、甚だしいものになると、大豆を一と握りづゝ食ひ、漸く三度の餓を凌ぎながら經書を研究した大椿や、豆腐の殻ばかり食つて獨學した徂徠先生のやうな人もある、然うして多く學問した人は老ひて益々盛んに勉強し、斃れて後止むと云つた風があつた、更に極言すれば昔の武士的に養成された人は、悲哀苦痛の場合に臨んでも能く其の悲觀を抑制し、却つて之れを樂觀に變ずる、轉禍爲福の法を講じ、其の情緒を煩悶させぬやうに努めたものである、乃て忍術の秘傳書にも。

- ▲武士と云ふものは、ならぬ堪忍  
▲するが堪忍と云つて非常に忍耐  
▲の一事に對つて練磨するやうな

事が秘傳とされてゐる、然うして苟も忍術を體得したものが、若し危險に陥つて捕へられても、決して醜體を人に見せぬやうにと教へてゐる、それ故に忍

整息術は  
忍術の初  
歩

虚心の  
鍛錬  
平氣  
工夫

食はずに  
飢へぬ秘  
傳

術使ひはニツト笑つて切腹するものがあつたり、悲哀苦痛の場合に臨んでも、決して醜い顔や、醜い泣聲などを發せず、殊更に笑に紛らすやうに努めたものである、忍術に入るの第一としては以上のやうな精神練磨をするは勿論であるが、先づ其の初歩として整息と稱する術を學ぶのである、之れは即ち呼吸を整へることである、之れは何の爲であるかと云ふのに、他人の耳へ自分の息の音が少しも聞へぬやうにする爲である、其れから臍下丹田を太くして、殆ど禪的の境に入り。虚心平氣の域にまで達するのである、此の整息の術か調つて來ると、今度は變難に對する臨機の方法として、食はないでも減多に飢へないやうな習慣を養ふのである、即ち絶食しても少しも身體の弱らぬ練習を積むのである、其れから又、眠らずして疲れぬと云ふやうな練習もするのである。

▲昔の仙人は霞を食ひ露を吸ひ雲

▲に乗つて翩翔したなど、云ふ話

# ▲もあるが

眠らずに  
疲れぬ方  
術

雲に乗つ  
て飛ぶ妖  
術

随分コンナことも出来ぬものとは限らぬ次第である。要するに努めて練習さへすれば、驚くほど巧妙の域に達しられるものである、食はず眠らずして疲れぬと云ふ試しは我が邦には澤山あるが、西洋の方にも其の例に乏しからずである、一體古今の英雄豪傑を見ると其の精力の旺盛なること常に萬人に卓越してゐるものである、精力が絶倫であるから、事に當つて邁往して少しも屈しない業を執つては堅忍にして撓まない、然うして之れを運らすに繼續の精神を以てするのである、されば邁往の氣象と云ひ、堅忍の意志と云ひ、或は繼續の精神と云ふも、要するに源泉の滾々たる一精力の發動したものに他ならない、現代の言葉で云へば、精力主義など、云つてゐるが、剣道の奥儀でも柔道の奥儀でも、忍術の極意とするところでも、凡て此の精神の練磨の産物である、ナポレオン大帝の壯時には、如何に困憊した折でも僅かに二時間の睡眠すれば、心身爽然として忽ち精力を回復したと稱されてゐる、故にナポレオン大帝は不可能

と云ふ語を嫌ひ、之れを辭書の中から削り去らんと欲したことのあつたのも、決して偶然ではなかつたのである。瑞典の英主カール十二世は、夙に覇業を中歐に立て、露西亞のペートル大帝を抑制したことが十餘年にも及び、其れより進んでモスコに攻め入り、一擧して其の志を成就せんと欲したのであつたが、不幸にして嚴寒の候と戦ひ、ポルタワの一戦利を失ひ、退いてトルコに入り、更にトルコの皇帝を動かして露國と戦はしめ、ブリュートの役に將にペートル大帝を捕へんとしたるも、トルコの將軍の中に賄賂を貪つたものがあつて惜しい媾和をして了つたので、カール大王は怏々として樂まず、トルコに居ること暫らくすると。

▲強敵が聯合して瑞典の本國を攻

▲むると聞いたので急ぎ歸つて之

▲れを救はんと欲して

別れをトルコ皇帝に告げ、千七百十四年の十月一日、其の旗下の兵を率ゐて  
デミルタシユの行宮を出發した、時にトルコ帝から鹵簿の一隊を附して、道路  
を警蹕させ、且つ國內沿道の總督等に勅して歡待せしめたので、カール大王の  
車駕の過ぐるところは送迎雲のやうて、早くも日が經つて一ヶ月餘りになつた  
然るに本國から飛報があつて、瑞典領のポメラニアと云ふところの首府ストラ  
ルサンドの急を告げられたので、大王は單騎之れに赴かんと欲し、左右の之れ  
を危險視するの少しも顧みないで、獨り侍従のチユーリングと云ふものを從  
へて、急に馬を走らしたのであつた、此の時の大王は身に長套を着け、腰に一  
劍を佩び、獨逸の士官だと云つて走つてゐたのであるが、平素より此の大王は  
餘りに高名の人であつたので、態々路をハンガリーから、モラヴィ、奧地利、  
巴威利、ウルテムベルヒ、バラチナ、ウエストフアリ、メクレムベルヒに取  
ることに決したので、之れを順當の路に比べると、殆ど一倍半の遠距離となつ  
たのである、其れて出發の第一日には、大王が馬を走らしたこと終日、夜に入

つても尚ほ疾驅するので、お供をしてゐたチエーリングは如何に少壯の武士であつたとは云へ、困頓すること實に甚だしく、遂に馬から下りて、路側に箕据して大王に謂つて、何分にも人馬共に疲れて夜も亦た闇黒なれば、糞くば宿舎に就かんと願つて見たが、大王は憐ばぬ色を浮べられて、汝は路銀として幾らを持つて來たのかと問はせけるに。

▲金一千兩なりと答へければ然ら

▲ば其の一半を我に附せよとあつ

▲て更に大王は

我れ今、汝の狀體を見るに、畢竟するに迤も我れの道連れとするに足らず、

我れは之れより獨行すべし、汝は後より來れと云はれたので、チエーリングは哀願して、臣豈に陛下に離るゝに忍びんや、已むことを得ずば唯が僅かに三時間だけ、陛下よ、忍びて此に憚はせ給へ、然らば臣の疲れを醫して、然うして

陛下に奉隨せんと願つたが、大王は固く執つて聽き給はず、デューリングも今は其の争ふても無駄なるを知つて、即ち五百兩を取り出して王に捧げた時に、王は更にデューリングに命ぜられて、驛站に就て繼馬を求めさせれば、デューリングは一計を按じ、二兩の金を馬役人に賄ひて、懇々と頼んで云ふには、自分は兄と共に連れ立つて來たものであるが、今此の地に附けるに心地例ならず、暫らく休息して自分の病氣を醫せんと云つて見たが、兄は其の性質が急激の男であつて、自分の願ひは聽き届けられず、獨り自分を此の地に遣つて、單騎で走り行かんと欲してゐる、願くば兄に惡馬を與へて、自分の爲には駿馬を與へられよ、然らば自分は二三時間の休息して發するも、必らず兄に追ひ付くべしと頼んだので、馬役人は其の通りにして呉れたが、大王はソナナことゝは少しも知らず、時に夜は既に十時であつた、馬を代へて獨り出發されて見ると道路は闇黒で一寸先も見へず、雪は雨に交りて降り、疾風は甚だしく馬は瘦馬で如何に叱つても動かない、大王は大いに怒り給ひ、遂に馬を棄て、闇を冒

して行くこと數里であつた、然るにデューリングは此の間を利用して、驛舎に  
 睡ること數時間の後、駿馬を駆つて大王の後を追ひ、天明の頃に至りて、前途  
 遙かに大王の歩行して居られるのを見、デューリングは飛び立つやうに喜び、  
 次の驛に於て漸やく一臺の馬車を雇ひ、大王をして車上に睡らしめ、之れより  
 後は晝間は馬で馳せ、夜は馬車を驅りながら僅かに車上に睡り、風雨と戦ひ、  
 氷雪を冒し、晝夜兼行、遂に一夜も旅舎に就かずして、十六日間の長途旅行を  
 馳せ続け、十一月二十一日の夜の一時と云ふに、始めてストラルサンドの城門  
 に達したのであつた。

▲實に其の精力の旺盛にして強膽

▲無双であつたことは驚く許りて

▲はないか

時に大王は歩哨に立つてゐる兵士に語りて、面謁を主將デューケルに通ぜし

め、我れはトルコに駐蹕し給へる、我が國王陛下より重要な使命を帯びて來たものであるから、直に將軍に見へて之れを傳へんと欲するのであると云つたが、歩哨の兵は之れを遮りて、今は何分にも深夜にして、總督閣下は就寢せらる是非とも閣下に見へんと思はゞ、明朝早く來たられよと、大王は更に、事極めて急である、若し今夜之れを通ぜぬと、明日汝等は嚴罰を受くるやも知れないと云はれたので、歩哨は已むを得ないと思つて、之れをヂューケル將軍に報ずる、即ち將軍以爲へらく、陛下左右の一將校でも、何等かの使命を齎らして來たのであらうと察して、命じて之れを寢室に案内させたのであつた、時に大王は既に將軍の寢室に入つたのに、ヂューケル將軍は尙ほ臥床にゐて、睡眼未だ定まらぬ状態をして、眼を摩りながら問うて言ふに、貴官何の使命を帯びて來たられしなるかと、然るに大王は突と立つて其の脇を把り、噫、我に忠願なる一將も、亦我が顔を忘れたのかと、其の聲に驚かされて顔を仰ぎ見ると、是れ實に瑞典の大王カール十二世陛下であつたのである。

▲茲に於てデューケル將下は床よ

▲りスベリ落て脚下に伏し大王の

▲膝に接吻して

感極まりて言ふところを知らず、唯だ見る其の眼底より狂喜の涙の滴々として落下し來るばかりであつた、然るに此の報が忽ち全府に聞へて、家々では皆な門を開らき、人々は皆な衢に聚まり、口々に叫んで云ふ、大王單騎城中に入られて、我等を既亡の中より救ひたまふと、忽ちにして祝砲轟々、其の響き滿府を動かし、祝杯を擧ぐるもの、國旗を掲げるもの、一府の人民皆發狂せる如し、將校は王の左右に蟄集して、先づ大王の長靴を脱せしめて、長途の勞れを休めしめんと欲し、手に／＼之れを曳けども、何分にも十六日間、其の足に穿たれてゐたのであるから、固く膠著して動かんともしない、乃て小刀を以て其の革を寸斷して、漸く之れを除去することが出來たのである、デューケル將軍

は便服を求めて来て王に捧げ、王は乃ち服を改め、茲に於て始めて臥床に就き一睡すること數時間、覺め來れば即ち諸將を聚めて、各種の情報を聽き、一々訓令を與へ、了れば直に諸隊を檢閲し、諸保寨を巡視して、少しも倦み疲れたる色がなかつた相である。

▲如何に忍術を習得しやうとして

▲も精神の薄弱の怠けもので少し

▲も奮發心のないものは駄目だ

我が邦の忍術の秘傳の中には、忍びあるきの術と忍びおよぎの術と云ふことがある、其れて此の歩行の仕方は普通の歩行かたと違つて、ドコまでも足音を忍ばせて音のしないやうに歩行くのである、併し人目に附かない方法と云へても、要するに練習を以てするので、努力さへすれば誰れにも出来る事柄であつたのである、一體何の爲に蟹のやうに横にあるのかと云へば、家並みのとこ

ろや、扉などに沿ふてあるく爲で、然うして横にあるけば割合に音がせぬからである、併しコンナ忍術の秘傳も明治維新となつてからは、格別に用ひ場所がないので、殊に伊賀流の名人連中で、碌に離れて了つたものが、内職に忍術を應用して、樹の上に止つてゐる多くの寐鳥を捕へて歩行いたものなどがあつた相である。

▲併し或る忍術の秘傳書の中に若

▲し能く此の術を體得すると一日

▲に三四十里を行けるとあつたが

これは寤かに横歩行きてはないのである、夫の駈け足の競争して、東海道を僅かの時間で往復すると云ふことが、現に今日でも行はれてゐるではないか、矢張りコンナ按排に大體は猛練習の結果でなくては出来るものではないのである、慶安年間に陰謀の旗上げをした由井正雪の與黨の中に、傳壁と云ふ大坊頭

があつて、其れが早足の名人であつたと傳へられてゐるが、彼は最初に増上寺から貳千兩の小判を兩掛けて擔いで、然うして之れを京都の比叡山に納める爲に、東京を出發して其の日は小田原で晝食して静岡で泊つたと云ふのである、今、慶安太平記に依つて當時の光景を調べて見ると、其の道中した傳達の人物が詳しく分かる。

▲忍術を以て東海道を僅かの時間

▲で飛び歩行いたと云ふ慶安時代

▲の傳達と云ふものは

後には正雪一黨の領袖となつた吉田初右衛門のことである、されば慶安太平記に斯う云ふ記事が載つてゐる、今や傳達は川崎宿を越して、其れより鶴見生麥と差掛つて來ると、モシ〜御出家様〜と呼ぶものがある、然うして其の者の云ふには、ドウも却々貴僧はお身装も大きいが足も達者であつてになる

と云つたのが初まりて、傳達は此の男の道づれになつたが、イヤドウも此の男の足の速いこと、云つたら、實に言語に斷へたるもので、小兵の男ではあるが宙を飛ぶかと思はれるばかりで、流石の傳達も實に舌を巻いて驚いたのも無理はない、此の男は當時の天下に響き渡つた大義賊の帳本にして甲州流の軍學をさへ極めてゐる高坂甚兵衛と云ふ男であつたのである、併し此の甚兵衛でも傳達でも別に横歩行きはしてゐない。

▲横歩行きをするにしても或は眞

▲正面に走るにしても兎に角に駈

▲け足の秘訣は呼吸にある

飛行的駈  
足の秘訣

呼吸と云ふものは駈足の耐久力に非常に影響するものである、然うして内臓の諸器官とも極めて密接の關係を有つてゐる、呼吸の急迫を出來得る限り避けるには、先づ呼吸を七八分に加減せねばならぬ、呼吸を常に二三分の餘裕を殘

すことは、數十里を走るに最とも緊要のことであつて、其れは少しの注意と練習とに依つて容易に體得されるものである、詳しく説明して見ると、呼吸は充分に吐かないで、二三分だけは肺の中に残して置くやうな氣味にして、何時立ち止つても呼吸は必ず平生のやうに調攝することの出来るだけにせねばならぬ、然うして談話でも駈けてゐながら出来る位でなくては面白くない、誰の身體でも通例として、上の方は疲れるに従つて屈み勝であるが、此の屈むと云ふことが既に呼吸の切迫する原因となるから、如何なることがあつても、決して身體を前方に屈めてはならぬ、上の半身は常に鉛直に保つて、出来る限りは呼吸を整調して、然うして斷乎として鏡氣を胸腔に蓄へて邁進せねばならぬことである。

▲此の呼吸を二三分残して置くこと  
▲云ふことは實に忍術の秘傳とし

### ▲て深く考へて貰ひたい

初めは誰れでも少しく骨を折ると息の切れ易いものである、併し之れも猛練習に依つて必らず調攝することが出来る、一體人間の呼吸と云ふものは、人體の健康に大關係を有するやうに思はれる、古人が臍下丹田に思ひを潜めたと云ふのは、要するに呼吸の整調其の處に適つて、能く身體中に銳氣を充實させた次第に他ならない、何にしても此呼吸を七分目にして、二三分残して置くと云ふことは、駢足敏活の度を加へて、耐久的の力を増し、健康をして益々増進させる原因にもなるものである。

### ▲世には忍術など、云つて無暗に

### ▲駢け歩行きの練習を度々すると

### ▲心臟病になると考へてゐる

馬鹿な人もあるやうだが、之れは全く詰らぬ盲斷に過ぎない、現代に於ける

鳴や鳴に  
手掴みに  
出來る

駢足競争に有名なる日比野寛先生の實驗談に依れば、性來劣等にして病的なる心臓でも有つてゐるものは例外であるが、普通一般の心臓を有つてゐるものは、此の駢足は決して心臓を傷けない許りではない、寧ろ其の強健を著しく増させるものである、即ち駢足に於ける場合の此の呼吸の調節は、之れを常時に用ゆるも心臓の作用をして、益々堅牢に且つ耐久のならしむるものである、駢足をを行ひたる爲に心臓病になれりとするものは、恐らく其の身の不養生の罪を妄りに之れに嫁せんとする者共である、其れでなければ駢足の場合に於ける呼吸の調整に周到なる注意を拂はないものゝ自ら招いた罪である、自分は四十歳を超へてから始めて駢足の練習を爲し、五十歳の今年に至るまで、少壯者の間に伍して、予の心臓は更に何等の患ひもない、其の長短距離に論なく平然として疾走踏破し得るものは、予が此の斷案の生ける證據であると云つてゐる、然うして亦た之れ決して予が駢足に於て天賦の力を有つてゐるのではなくて、予の呼吸法が予の駢足に於て最も適當なる方法を得てゐるからであると思つ

てゐると附け加へて云つてゐる。

▲次に水の中で忍術の秘訣とする

▲ところを研究して見ると同じ水

▲泳術でも忍術の方では

少しも水面に波紋をも立てず、亦た何の音をも立てないやうに泳ぐのである之れは俗に言ふところの立ち泳ぎをするのであるが、何にしても極めて熟練した忍術者になると、水の上に浮いてゐる鷗や鴨でさへ手で捕へるのが左まで困難でないと言ふから恐ろしいことではないか、併し水中の忍術となると熟練以外に機智も入用のものである、或る實録に依ると、昔し明智光秀が謀反した時に、若し事を擧げてても肝腎の御大信長公が本能寺にゐれば一大事を生ずるから豫め忍術の名人某を撰んで一週間ほど前に、信長公の在否及び部屋の間取等を探索せしめた事があつた相であるが、當時其の撰に中つた忍術使ひの何某は、

本能寺の奥深く入つて、信長公の夜中の状態から、防備の順序をも捜り盡して悠々として歸り去らうとした時に、曲者待と呼ばれて、蘭丸の爲に追ひ詰られて、仕方がないから裏庭の蓮池の中へもぐり込んで了つてゐた。

▲不思議のことに思つたので本能

▲寺につめてゐる多くの武士が手

▲を揃へて搜索してもゐない

然るに忍術の名人某は漸やくにして蓮池の中へもぐり込んで、刀の鞘の鐙の邊を切つて之れを口に含み、鞘の上端を水面に僅に出して呼吸器を作り、其れで現今ならば夜の二時頃から翌日の夜の二時頃まで、丁度二十四時間ばかりと云ふものは、此の急造の呼吸器械を利用して、全く水中に隠れてゐたのである水道の術と云ふものはいそ／＼あるが、之れを大きく云へば今の潜航艇は駝かに水道の術の完成したものであると云つて可いかと思はれる、小さく云へば將

に此の某の二十四時間もぐつてゐたのは水遁の術と名づくべき性質のものである、併し亦た少しも器械の力を借らない水遁の術も澤山あるが、斯うなると矢張り激しい稽古をして練磨せねば出来ぬ問題である、例へばツイ此の間のこと、鈍子の犬吠岬とやらで、文士の朽葉と云ふ人と、白楊と云ふ人が溺死したことがあつたが、其の死體を搜索する爲に毎日／＼海女を雇つたとあつたが、熟練とは云ひながら海女はいつまでも水遁の術をやつてゐると云つて可い位のもてはないか。

▲次に飛び下り飛上りの忍術の秘

▲傳と云ふものがある此の飛び下り

▲の稽古をするには

最初の中は下に蒲團を澤山敷いて、其の上へ屋根から轉がり落るのである、浅草公園などで興行してゐた輕業師が、天井裏の高いところでする藝當である

と、其の危険を防ぐ爲に下に網を張つて置くのも同じことである、屋根の上から轉がり落るなどでも熟練して來ると何でもないことである、可なり高いところから轉げ落ても怪我などは少しもせず平氣なものである、亦た少しも慣れないものが高い屋根の上に乗ると、足がブル／＼震へて始末の附かないものであるが、消防人足や昔しの鳶職人などは一本の杉丸太の上をも駆け歩行いてゐるではないか、昔し水戸の黄門卿が日光の山奥へ入り、數百丈もある溪に架けてある丸木橋のところへ來たら、黄門卿は謠曲の橋辨慶を聲高らかに、謠ひながら拍子を取つて軽々と渡つて了つた、お供に立つてゐた劍道の達人、佐々木助左衛門も劍道の極意で軽々と渡つて了つた、けれども一所に附いて來た宿屋の主人公はドウしても渡れなかつたと云ふ話がある。

▲忍術の名人になると高い屋根の

▲上で人と組み打しても滅多に下

▲に轉がり落ちない

其れは虚心平氣にして幾ら高いところでも大地と同じであるとお念してゐるからである、勾配の急になつてゐる屋根の上で轉けても身體を堅くしてゐれば止め度もなく轉けて行つて、落つれば大怪我をするものであるが、身體を出來るだけやはらかにしてゐれば、轉げ落やうとしても却々落られぬものである、例へば圓い石を屋根に置くと、ころ／＼と轉げ落て行くが、豆腐を置いたのは、幾ら圓く切つて置いても決して轉がり落ない道理と同じことである其れから又、今度は飛び上りの術であるが、此の練習の第一歩としては、兵式體操の馬飛びなどは最とも適したものであるが、昔の人の練習した方法としては、廣い庭の中の一定の場所へ、麻の實を一間四方位の地面へ播くのである然うして其の上を毎日／＼飛んでゐるのであるが、麻の草は毎日眞直に成長して、五寸となり一尺となり、果ては自分の脊丈け以上にもなるのであるが、併し毎日順繰りに飛んでゐると、遂には脊丈け以上になつても、或る程度までは必らず飛び越へ得られるやうになるものである。

▲以上の凡ての忍術に關する秘傳

▲は普遍的に身體を練磨する方法

▲を述べたのであるが

此のやうな練磨に依つて身體を輕敏ならしめ然うして嚴重の防備のあるところへ忍び入つたり忍び隱るゝの妙を得るのであるが、段々と此の効を積んだ忍術家は其の身體が堅くて肥らず、多くは小兵の人物である、一體に劍術でも、柔道でも乃至は忍術でも、其の發達の根本は、小さいものが大きいものに勝るとする工夫から起つたものである、牛若辨慶でも、正雪と忠彌でも、我が邦の歴史的傳説では、多くは小を以て大に勝つた話ばかりである、然うして之れは支那の方には決してない話である、楚の項羽は身長九尺にして其の力能く五千斤の鼎を扛げ、鬪羽は八十二斤の青龍刀を振り廻したなど云つて、支那の傳説には小さい豪傑は一人もゐない、要するに支那人の間には小を以て大に勝つ

と云ふことは興味も惹かないやうである、従つて小はドウしても大には敵せぬものだと言はれられてゐたのであるから、劍道でも柔術でも支那人の間には發達しなかつたものである。

### ▲其れから忍術の方には獨り自分

### ▲の身體や精神を練磨する許りで

### ▲はない忍びの道具もあつて

忍術上必  
要の機  
械  
研究

忍術使ひは何れも相當の道具を使つてゐるのであつた、第一に五寸と稱する釘である、夫の五寸釘寅吉など、云ふ盜賊の名は之れから附けられたものである、此の釘は今はないが昔に使つたものを見ると、長さ八寸位ある太い釘のやうなもので、其の上部の三寸ほどをギリ／＼と糸で巻いてあつて、其れに長い紐が附いてゐる、然うして其の紐は忍術者の帯に結んである、之れは何をする爲の釘であるかと云ふのに、彼等は之れを五六本位持つてゐて、忍び入る際に

は塀若しくは羽目へ斜に打込んで足場にして、下の方から順繰りに抜いては上に打込むので幾ら高いところへても上つて行ける譯である、其れから忍術者の使用してゐた刀は普通のものよりも短かく作つてあつて、下げ緒は非常に長くしてある、之れは塀などへ上るときに、此の刀を立て掛けて其れを足場として上つて了つてから、下緒を手繰つて手に取るのであるが。

▲多くの盜賊共は大概此の道理か

▲ら考へ附いて刀を用ひずとも例

▲へば塵箱の蓋でも立掛けて

其れを足場にして容易く塀を乗り越す相である、然うして若し針のやうな忍び返しを塀の上に設けてあれば、豫め灰吹のやうなものを五六本も用意してゐて、何んでもなく忍び返しを乗り越すと云ふ話である、亦た忍術者は自分の姿を暗の色に隠す爲に、二尺四方位の鼠色の布を持つてゐるが、之れは目なし頭

巾きんに縫ぬつてあるものもある、何いづれにしても此このやうな布ぬのを以もつて顔かほを蓋あふて敵てきの目めを逃のがれるのである、夜よに入いると人ひとと云いふものは足あしもとを注ちうい意いして見みるものはない、大た概がいは上うへの方ほうを注ちうい意いしてゐるものであるから、目めなし頭づきん巾きんは大おほいに效かう能のうのあるものに違ちがひない、其それから亦またた、忍にんじゆつしや術じゆつ者しやの持もつてゐる手てぬぐひ拭ひは普ふ通つうのものよりも一しやうくちやう尺ちやう位ゐは長ながくしてある、之これは塀へいを乗のり越こへる時ときに、此この手てぬぐひ拭ひを濡ぬらして塀へいの上うへへピタリと叩たきつけると、濡ぬれた手てぬぐひ拭ひが塀へいの内うち側がはに粘ねん着ちやくするので、之これにつらまつて身み輕かるな身からだ體たいを飛とびあがらすことが充じゆう分ぶんに出で來きるのである、併しかし盜たう賊ぞくの中なかには自じ分ぶんの締しめてゐる犢ふとどし鼻び揮しを解といて、此この代だい用ようを勤つとめさせる相さうである、されば一本ほんの犢ふん鼻び揮しさへあれば忍にんじゆつしや術じゆつ者しやは一ちやうくちやう丈ちやう位ゐの煉れん瓦ゐ塀べいでも何なんでもなく飛とび上あがつて、容たやす易やすく乗のり越こへることが出で來きる相さうであるから驚おどろくではないか。

▲更さらに又また忍にんじゆつしや術じゆつ者しやは必かならず一しゆ種しゆの羽は

▲織オリを着きてゐるものであるが之これ

## ▲は道具を隠してゐる爲めと

萬一の場合には武器ともなるものである、若しも敵が手強く切り込んで來たときには取り敢へず羽織を脱いで投げつける、然うして敵が之れを拂ひのける隙に身を免れるのである、此の實例としては昔しからある劍客談を讀むと澤山ある、寛永御前試合と云ふ講談に荒木又右工門と諸岡一羽齋のことがある、極意」皆傳の間に燈明を上げ、極意三卷を堆高く經机の上に飾つて置き、其の傳授の間に一羽齋は寢て居ります、荒木は客室に、岩間、土子の兩名は自分の部屋に寢て居ります、深々と更け行く冬の夜に、密と奥へ行つた難波角左工門、充分に身支度をして荷物を西行脊負にして、拔足差足忍び足、師匠一羽齋の傳授の間へ進んで來て、ソツと唐紙を開けます、心ある武士は霜降る音に目を覺すと云ふ位、況して一流の老先生、唐紙が開く音に目が覺めて。

## ▲忍び込んで來る角左工門の頭の

## ▲上から曲者ツと矢聲諸共掛けて

### ▲ゐた布團をモロに被せた

失敗ツつたと脱がんとする角左工門、何にしても名人の一羽齋に被せられたのであるから、脱ぐにも手間の取れてゐる間に、一羽齋は飛掛つてムンヅと押へ附けたとあるが、忍術者の羽織を擲げる場合は之れと同じやうな譯である、其れから又、時に忍術家が刺客として行く場合には、決して銘の附てゐる短刀は用ひない、諸大名等の隠密と稱するものが、刺客となる場合には、新刀の極めて肉の厚い鎧通しを用ひるものである、然うして敵の部屋に忍び込んで、少しも物を言はずに唯だ一と突きに突き刺して、其の刀を刺した儘で歸つて來るのが法則になつてゐる、若しも刺した刀を抜く途端にキアーツと聲を立てられる恐れがあるからである、之れが妙なもので、刀を刺した儘にして置くと、苦吟の聲は發しても、ウーンと呻く位のもので、大きな聲は出ないものである、然るに刺した儘の刀を置いて來るのであるから、ドウしても其の刀に銘があつては足が付き易い、故に新刀の無銘のものを用ひる法則になつてゐる。

▲次に忍術者は現今で云ふ物理学

▲と建築學とを應用して殊に光線

▲の研究をしたものである

例へば安燈の何れの方から行けば目に附ないとか、提灯の何れの部分は影になつてゐるとかのやうな研究をしたものである、夫の龕燈などは最も都合よく考へたものである、現今の盜賊は昔の龕燈から考へて、竹筒を扶ぐつて其中へ蠟燭を立てる相である、之等の事は今日から考へると、極めて幼稚な研究にして、懐中電燈を改善すれば、可なり面白い忍術用の燈火も出來やうと思ふが、併し昔の人は、かゝる光線のことを充分に呑み込んでゐて、之れをイザ鎌倉と云ふ突差の場合に應用したのであるから感心である、其の實地應用の例をあげて見ると、床の中に寢てゐる人物の眼と自分との位置及び方向を考へて見て、ドツチから進めば最も遅く發見されるであらうかと研究してゐる、若し

も先方の人物が仰臥してゐる際には、頭の上の邊に隠れてゆく、斯うすれば氣取られ了つて、萬一置き上られても其の人物が首を後ろの方へグルリと廻さなければ俄に發見されない道理である、尙又建築學と云ふと大業であるが、忍び込みに際しては豫め家の外部の構造と其の大小から計つて見て、何れのところが客間にして、何れのところが居間に當り、何處に廊下があつて、何處に便所があると、其の外部を見て内部にある凡ての構造を鑑定するのである、最も昔の建築には一定の法式があつて、其れに依つて建てられて居たのであるから、大概は此の見當が外れるやうなことはなかつたのである。

▲更に忍術の秘傳の中には不思議

▲の幻術をやることが澤山にある

▲が之れは妖術の部に屬してゐる

併し妖術の中にも其の身を梁の上に隠したり、或は柱に一寸手を觸れると攀

ち上れたりするのは練習で出来るものであるが、之れを稱して魔法と云ふやうなことになる、化学や心理学を應用して始めて出来る藝である、藝を驅使した天竺德兵衛とは如何なる手段をやつたものであるか、白縫姫の蜘蛛を驅使した言や、其の他にも澤山ある傳説中の奇談は果してドンナ真似をしたのであらうか、之れを説くには先づ變體心理学の方にある多くの不思議の話を紹介せねばならぬ、妖術とか魔術とか云ふと、其れは唯だ人間の五官の缺陷してゐるところに乗じて眼を暗ましたり、心を暗ませたりするのであるが、併し學問上の上から攻究した理論を實行して、少しも刃物も藥物も用ひないで、犯罪にも何にもならぬやうに人を殺すことも出来るものである。

▲ 刃物入らずの人殺しは戀に溺れ

▲ てゐる青年男女の間に謎のやう

▲ に語られるばかりではない

人間社會には事實に於て不可思議な手段を以て人を殺したものが澤山ある、然うして其れが妖術でも何でもないものである、今の世界の中心地であるセルビアに、刃物入らずに人を殺した實に面白い實例がある、此のセルビアと云ふ國の首府はベルグレードと云ふ市が一番繁昌のところであるが、此所の市役所の役人にアデスと云ふ一人の屬官がある、此のアデスと云ふ役人は却々身體の壯健な人で、役人になつてから二十年間、未だ曾て病氣の爲に一回も役所を休んだことがない相であつて、極めて精勤家と云ふので、長官の信用を得てゐる人である、然るに世の中には厄介な人物の多いもので、アデスが斯う云ふやうに能く役を勤めて長官の氣に入るから、他の役人共が之れを憎んで、ドウかして彼を一日でも休ませて見たいものだ、五六人の同役が共謀して、或る日のことアデスが相變らず役所へ出て來た其の歸り道を見計つて、待伏をしてゐたのである、アデスはソナ事とは露知らず、晩方になつてブラ〜と家の方に歸つて來ると、一人の同役が物蔭から現はれて、やアお前は何處か悪いの

てはないか、大變ドウも顔附が尋常でないと言つて、怪し氣な顔をして別れて行つた、乃てアデスは自分の身體が強壯であるから、別段に何とも思はなかつたが、コンナ事を云はれるのは變なことであると思ひながら家の方に歸へる。

▲然るに又た二三丁行くと今度は

▲別の同役のものがゐてやア君の

▲顔はドウしたものだ

大變に惡るい色ではないか、何處か身體に變つたことはないか、此の頃はコレが流行するから、大いに注意し給へと云つた、ハテ之れは愈々變だと思ひながら又歩行てゐると、今度は亦た或る同僚のものがゐて、やア君と云ひながら顔を見て、ドウも君の顔は眞青になつてゐる、一寸脈を見せ給へと云はれて、脈を見て貰ふと、之れはドウも脈が高い、何でも深い注意を要する、君の脈は今に實に百四十度から打つてゐる、キツとコレラになる前兆に相違ないから、

蝶々二匹  
で人を殺  
した話

病院に早く行くが宜しいと鋭く言つた、此の一言を聴いたアデスはアツと一聲叫んで其所に悶絶して、其の擔架に乗せられて家に歸つたが、可哀想に其の晩の中に死んで了つたと云ふことである、之れ實に精神作用で人を殺した實例であるが、コンナ事には我邦にも面白い實例がある、著聞集と云ふ本を見ると斯ウ云ふ事が書いてある、其れは蝶々二匹で子供を殺して了つた實例である、或る所に甚だ蝶の嫌ひな子供があつたが、其の親は子供が駄々を捏ねた時は、いつも蝶を持つて來るぞと威かして、效を奏してゐるのを常としてゐたが、或る時に子供が非常に強情張つて單純なる蝶の威かし許りでは效能がなかつた然るに子供を最初の間は狭ひ押入に入れて、其の中に蝶を一二匹放して置いたのだが、其の子供は暫らく泣き叫んでゐたが、暫らく經つと聲がしなくなり、妙に靜かになつたので、押入の戸を開けて見たら、いつの間にか死んでゐた。

▲然うして蝶の觸れたところは一

▲面に紫色に變つてゐたとのこと

▲であるから怖ろしい。

又歐羅巴で有名な話となつてゐることは、死刑に處すべき罪人があつて、之れを醫學上の實驗に供して、人間と云ふものは、單に精神作用ばかりで死ぬものであるか、ドウかと云ふことを試験して見たことがあつた、即ち其の罪人には、貴様の腕から血を絞つて命を取るぞと宣告して、其の血は今こゝで吾輩が一つ二つと云つて、何十まで數へると死ぬぞと云ひ聞せて、罪人には目隠しをして置いてサア斬るぞと云ひ、腕を切つたやうな刺戟を與へ、其の上を生湯をポタ／＼と落とし、血の流れるやうに思はせて置いて、大聲を發して一二三四と次第に數へ立て、遂には曩に云ひ聞せて置いた數に達した時、何十幾つと特に大聲に叫んで見たら、不思議なるかな其の罪人はバタリと仆れて、其の儘死んで了つた事があつた相である。

▲我邦でも首斬淺右工門の直話に

▲依ると万の峰打ばかりで大概の

▲ものは死ぬさうである

實に精神作用ほど怖ろしいものはない、或る富豪のお嬢サンが夜中に水を飲んで、翌朝起きてから水差の中を見たら、其の底に赤い虫が沈んでゐたので、急に氣持が變になり、忽ち腹が痛み出して、嘔吐をしたり下痢したり非常の病氣になつた、然るに主治醫が嬢様附の女中から、前後の経過や事情を聞いて、見て、之れは疔かに精神作用から起つたものと考へたので、早速に嘔吐劑を與へて、其の嘔吐物の中に赤い絹絲を小さく切つて密かに入れて置いて、お嬢様に向つて、モウお腹の中の虫は残らず出ました、貴嬢のお腹の中にはモウ何一つ残つてゐないと云つたので、其れて病氣がケロリと癒つたと云ふ話もある、斯ウ云ふ面白い精神作用の成功談は歴史の上にも澤山ある、昔し希臘の全盛時代にはスバルタの隣國から、外寇を防ぐに就て、スバルタ一等の勇將を貸して吳

れと頼まれた事があつたが、當時のスバルタは隣國の盛んになるのを好ましか  
らず思つてゐたので、評議の結果此の人こそスバルタ第一の名將だと云つて詰  
らぬ跛足の文學者を貸してやつたことがあつた。

▲然るに精神の力は怖ろしいもの

▲で此の跛足の文學者を名將と信

▲じてゐたので

勇氣が日頃に十倍したところへ、此の先生が亦た心力を盡して勇壯な軍歌を  
作つて之れを味方に謠はしめて進軍したので、實に意外なる大勝利を博したと  
云ふ歴史がある、之れに反して源平盛衰記を見ると、平の維盛が關東征伐をす  
る時に、齋藤實盛が餘りに關東武士の剛猛であることを話してゐたところへ、  
夫の富士川の鳥の羽音がけた、ましかつたので一も二もなく逃げ去つて、笑ひ  
を千載に残したことがあるではないか、日清日露の兩役に就て研究して見ると

いつも我邦の軍隊が連勝してゐる、少しでも負け癖がついては逆も戦争には勝たれぬものである、然うして又、將軍の中に名の高い不思議な勇將がゐると、其の軍隊は強いものである、乃木大將がアラビヤ種の大きな馬に乗つて、其の英姿を戦闘線に現はすと、一軍の兵氣が非常に亢奮して、ドンナ彈雨の中でも平氣で突撃するやうになるものだ相である。

▲更に又不思議なことは廻狐術と

▲云ふことがあつて俗に狐つかひ

▲と云ふものである

此の廻狐術に達することが出来ると、單に之れを武道の上に流用し得られる許りではない、處世の上の實用にもなるものである、昔から自分の身の上に係ることを豫知したり、或は天變地異を豫言したり、人の秘密を探つて吉凶禍福を卜知したりするものを狐使ひてあらう抔と云つてゐるが、此の狐使ひと云は

れる者の中で、俄かに成金になつたり、幸福の身の上となると、多くの人から嫉まれる、然うして其の嫉むものは皆な口を揃へて、彼れは狐を使つて他人の金錢を狐に運ばせるので、其れが金に金持になつたと云ふが、併し誰れ一人として狐に金錢を窃まれたものはないか、シテ見ると之れは嫉むもの、誣言に他ならぬ評である、然らば此の狐使ひと云ふものは悪黨であるかと云ふのに決してさうとは定つてゐない、由井正雪などは、アレが維新の當時であつたならば、耻かに彼れは總理大臣になつた人物である、彼を兎や角と誹議するのは、畢竟するに幕府の全盛の時代であつたからである、由井正雪は真に此の廻狐術の名人であつたのである、更に其の昔に溯つて見ると、阿部の晴明なども此の術の名人であり、弘法大師も名人であつたに違ひない。

▲一體狐と云ふものは其れが人間

▲と話をしたりして人間以上の靈

### ▲能を備へてゐるであらうか

其れは頗る疑問とするところであるが、此の狐を使ふ者は、例へば京都の稻荷山とか伏見の稻荷神社とかへ往けば、二十五圓から五十圓までの奉納金で授かることが出来る相である、然うして彼等に云はせると、之れさへ買つて來れば何んでも云ふ事や思ふ事が通ずると云つてゐる、併し實際は五十圓は愚なかと百圓出してもソナ都合のよい狐は手に入らぬものである、更に或る人の云ふところでは、京都のある神社へ行くと、嚴肅なる誓言の下に、七十五日間の修行をすると、暗魂と云ふ靈物を授つて來ることが出来る、之れを崇拜してゐると、自然に神通力を得られると云つてゐる、然うして其の暗魂と云ふものは、矢張り狐の異名だと評されてゐる、兎に角に何れにしても、此の神通力を得たものは、特に不思議なことが出来るものである、例へば世の中の事々物々が、何でも電話で聞くやうに、耳に感通し、或る場合には騒々しくつて困るほど、いろ／＼の話が輻輳して來ることがある相である、今其の感ずる話の二三の例

を擧げて見ると、

▲今日は何國の某氏から手紙が來

▲る筈であるがドウであるかと自

▲分て自分に聞くと

忽ち耳の邊で誰か側にて答へるやうに、其の手紙は今に配達されると答へる者があるやうに感ずるのである、スルト果して間もなく其の手紙が手に入ると云ふやうに、全く事實となるのである、若し亦た自分の心で、何所の何某は今何をしてゐるだらうと云ふ念が起ると、其の人は今日中に此の家に訪問することになつてゐる、然うして其の用向は金談であると答へるやうに感ずる、スルト果して其のものがソソナ用向で訪問して來る、或は亦た自分には何の氣も起らなかつたのに、突然耳を突くやうに、大變々、今此所へ刺客が二三人て襲撃しやうとしてゐるから、早く何れの方角の地へ身を避けよと警告される

やうに感ずると、果して其の刺客が來ると云ふ始末である、其れから又、國家の問題のやうな大きな事件でも、必らず豫知することが出来るのである、例へば今、歐州の戰亂地で、獨軍が聯合軍に向つて猛襲するが、其れはドウ云ふ結果に終るだらうと思ふと。

▲其れは既に聯合軍が奮闘した爲

▲に獨軍は數十萬の死屍を殘して

▲退却したのであると

答へる、或は又、農作物の豫想のやうなことで、能く中るものである、例へば今年は早稻の豐作であらうか、或は晚稻の豐作であらうかと思つて、自分の心に聞いて見ると、早稻が良いと教へて呉れる、其れをその通りにすると、果して秋の大嵐の爲に晩作は凶年であつた、或は又、米の相場でも株の相場でも百中するものである、例へば今、米を賣らうとして、其の如何を聞

いて見ると、賣ると損するとか何とか明瞭に答へる。スルト果して大暴騰したりする、又或場合には他人と對話中に、俄然として耳を突いて來るやうな大聲を張りあげて、對手の人にも聞へはせぬかと思はれるやうなことを聞せられることもある相である。

▲けれどもかゝる事相を科學的に

▲研究して見ると何れも皆な自分

▲の觀念の刺戟で

自分の頭腦を衝動させるところから起る幻聽であるから、決して他人に聽へる筈はないものである、又グツと古い昔しにあつた事でも現在の事實に見へたり、今現に起らうとすることが前知されたりすることもある、ドウかするとコナ人は、ソレ其處に首縊りがあると云ふ聲を聞くことがある、乃て其の人は仰いで其の方を見ると、果して古木の枝に首縊りがあるのを見たりする、併し

其れが自分には現在あるやうに見へても、其の實は二十年前に此の通りに死んだ歴史があつたのだと云ふ位の間違ひもある、然るに廻狐術の名人になると、コンナ間違ひは少しもない、例へば廻狐術を體得してゐるものが或る所を通行しながら、此の家では今に急病で死ぬものがあるとか、今夜此の家では赤ん坊が産れると云つて往くこと杯は幾らもある、然うすると果して其の通りの事がある、弘法大師などはコンナ事はザラに遣つて歩行いたものである、鍛練した狐術者になると、二十年でも三十年前でも、百里でも千里でも、ドンナ遠方のことでも、如何なる未來の事でも何でも透見するのは實に奇妙である、併しなからかゝることが實際に出来るるとすると、其れには必らず出来るだけの理由がなくてはならぬ筈である。

▲其れで段々と科學的に調べて見  
▲ると決して狐でも稻荷でもない

▲のである

之を要するにかゝる魔術的行爲は、自分で見たり又は自分で聞いたりして、其れを自分で見せたり聞かせたりしてゐるのである、言葉を代へて云つて見ると、一人でありながら二人若しくは二人以上の精神上の働きをするに過ぎないものである、心理學の方で云ふところの意識が分裂して狐の幻覺となり、稻荷の幻想となるのである、従前の狐使ひなどは斯う云ふ理由を少しも知らないから、全く稻荷や狐が話をして聞かせて呉れるものと信じてゐたのである、シテ見ると之れは單純なる迷信であると許りは否定し去ることは出来ないもので、殊に其れが能く百中するに於てをやである、けれどもかゝる事に練達するには、大體に於て人間の持つて生れた個々の素質に依つて、出來得るものと出來得ないものとの區別がある、曾て明治四十二三年の頃に新聞紙界を賑かした墓仙人の片田源七と云ふ爺さんがあつた、彼れの魔術は以上のやうな話と違つて、全然練魔の結果で誰にでも出來るものであると解釋されてゐる。

藝人の  
大磨の  
魔術

熱湯へ手  
を入れる  
法

焼け火箸  
を扱ぐ法

▲藝仙人の事を書いた當時の新聞

▲紙を見ると藝仙人こと片田源七

▲は今回關西地方へ十日間の

興行に行くので、お名残りとして七日午後四時から上野の常磐華壇で仙術を演つた、源七は例の通り、天照皇大神宮、大天狗、小天狗、東京では水天宮と、八百萬の神を元氣よく叱るやうに怒鳴るやうに唱へてから、先づヤアツと氣合の聲をかけるが早いか沸々と煮へ立つてゐる大鍋の湯の中から茶碗を三つ取り出して見せる、然うして其の湯の中へ兩足を踏み入れる、藥罐にグラ／＼沸騰してゐる湯を見物人に瀧のやうに自分の掌に注がせる、然うして又、兩手で抱へる程の石塊で我と我が頭をコツン／＼となぐる、けれども手も足も頭も更らに何ともない、今度は長さ三尺、太さ拇指位の二本の鐵棒、其れを焼いて烈々たる赤熱の、見るから凄まじいものを、大喝一聲ヤアツと言ひさま、手で芋握

りにした儘ツイと扱く、右手左手一回二回、五回六回七回八回、トウ／＼鐵は素との黒色に歸つて了つた、「ドウだ、手は此の通りだ、何ともない、チツとは臭いだらう、錆があるからな」と云つて得意のものである、サテ此の藝當の殿りは劍の刃渡りである、之れは實に千番に一番の兼合。

▲足の踏み方にお目止めて御覽じ

▲ろとも何とも言はずにヤツと聲

▲を掛けて

踏み上つたのは一個の梯子、其の横木にはスラリと抜かれた白鞘の業物六本、明晃々たる刃を上方にしてさながら人の血潮に渴へてゐるかのやうに列んでゐる、見物席の醫學博士岡田和一郎氏、夫人並に令嬢を始め、女中も半玉も藝妓も顔を背けてゐる、ヤツと一段上る、又ヤツと二段上る、トウ／＼六段上つた、又一段／＼下りる、實は記者も此時こそはハラ／＼したのであつた、岡田

和一郎博士曰く、仙人の技術は少しも不思議はない、一つは精神作用で、最初神に祈りを捧げて一心を其の技術に凝め、如何なる苦痛も我慢して退けやうと云ふ一種の教唆サツヂエスチオンを精神に受ける、第二は身體の修練で、長い間練習に練習を重ねた結果、肉體は學語で所謂角質變化をしてゐる、我々の家庭でも、自分では熱くて持てぬ鍋を女中は平氣で兩手で持つ、其の兩手は練習を経てゐるからである。

▲又我々が催眠術に掛つて赤い火  
▲を握る其の當時は熱いと思はな

▲くても

手は物質であるから、火は必らず其の細胞を焼く、従つて火傷は立派にしてゐる、詰り此の仙人は精神的修養と、肉體の角質變化とを兩方備へてゐるのであるから、熱くも痛くも我慢が出来るのである、其れのみならず、肉が厚くな

つて所謂るタコが出来てゐるから火傷もしない、又切れもしないのである、思ふに斯の如きことは、一つは教育上に取りつて可いことである、精神を一所に集中すれば、何事でも出来る、錬磨に錬磨さへ経れば何事でも出来ぬものはないと云ふ、實物教育を興へるものであると思ふ云々と、然るに之れを源七に就て聞いて見ると、イ當年六十八ですが、六十一の八月から練修を始めまして、此の七年間と云ふものは、女色を絶つは勿論のこと、肴や肉類をも全く絶ち、然うして技術を遣ると云ふ日になれば、其の朝から鹽絶ちをして、御飯と水計り用ゐます、例へば興業が三日續けば三日間とも御飯計りですから、却々辛い事です、今度は關西で十日續けざまに遣るのですから、辛い事ですよと。

▲之れを要するに慕仙人の妙術は

▲精神と身體との双方の練修から

▲鍛へあげたものであるが

心理學者の研究の方でも、之れは寔かに誰にでも出来る理窟のものであるが、唯だドウして之れまで修練し努力したものであらうか、ソコが大いに驚くべき筋のものであると説明してゐる、乃て精神と云ふものは實は頗る不思議にして、未だ今日の學者には解釋の出来ないことが澤山にある、精神の靈動など、云つて奇藝を演ずるものは澤山ある、例へば自分の思つてゐるやうに、いろ／＼の動物を自由自在にすることなどが出来る、西洋では猛獸使ひと云ふものがあつて、獅子でも虎でも思ふやうに働かせる、之れはドウして出来るのかと云ふのと、之れも矢張り精神の練修から生ずる作用である、今は故人となつた人であるが、桑原と云ふ催眠術の先生は、コンナ妙なことを遣つてゐる、其れは桑原と云ふ人が静岡の學校に奉職してゐた頃の話であるが、或る晩のこと、鼠の群が天井へ來て、矢鱈に駆け廻るので、其の物音のすさまじいと云つたら、恰かも雷鳴でもするやうであつた、乃て桑原氏は兼てより催眠術の達人であり、精練磨の功を積んでゐる人であつたので、一生懸命に思ひを凝らして、汝、鼠

の群よ、何故に然う跳ね廻るのであるか、下には人が寝てゐるではないか、人を害して快きものにもあらざるべし、早く跳ね廻ることを止めたがよい、然し、若しも汝等が食物のない爲であらば、吾輩は汝等に何程にても食物を與へて遣る、決して跳ること勿れと精神にて云ひ聞せつゝ、暗に吾輩の心を以て彼れ鼠等の精神に告げた。

▲然るに不思議なるかな忽ちにし

▲て鼠は跳ね躍ることを中止して

▲ガタリとも音がしない

動物を自由  
に驅使  
する法

實にアレだけの鼠が何處へ潜んだのであらうか奇と云はんか妙と云はんか、自分ながら頗る吾輩の精神作用の靈妙なることに驚いたと云ふことがある、乃て桑原氏は彼等(仲間)に違約せじと思つたので、早速に下女に命じて、一椀の飯を臺所の隅に置かせた、下女は之れを怪しんで、何故にかゝることをなさる

のかと云つたが、桑原氏は笑ひながら、明日になれば能く判かると云ひながら眠りに就いた、然るに果して明朝になつて、其の臺所の隅の椀を見ると、一粒の飯だに残つてはゐない、甚だ奇麗に喰ひ盡してあつたと云ふ事實がある、又名古屋の人で吉田と云ふ人が、催眠術を練習してから、或る日のことであるが、庭に澤山の雀が飛んでゐるのを見て、ドウか自分の精神の力で此の中の一羽だけでも、飛んで行くことの出来ないやうにして見たいと思ひ、凝らした精神を一羽の雀に注入したところが、都合よく効験を現はして、其の雀が飛ばんとして、立ち上がらうとすると、何物かゞ之れを制肘してゐるらしく見ゆるやうな風をして、少し飛びかけては、直ぐに止まり、又、飛びかけては立ち止まつて、トウ／＼一羽の雀は一群のものと後れて了つて、一處に飛ぶことが出来なかつたと云ふ事實もある。

▲更に人の心と小鳥との關係に就

▲ては梅溪と云ふ坊さんと桑原氏

▲とて面白い實驗をしてゐる

眞宗しんしゅうの僧侶そうりよで梅溪ばいけいと云ふ人は、獵師れふしが小鳥ことりを狙つて撃たうとするときに、桑原氏ばらしに向つて云ふには、自分は必らず其の鳥とりを撃せないやうにするから御覽ごらんあれと云つて、左さの通りとほの實驗じっけんをして見せたことがある、梅溪氏ばいけいしは或る時ときに法要ほふえうの爲め二三里り隔たつてゐる家うちへ行つた、其の途中ちゆうで氏の友人いうじんと自分じぶんとも一處しよになつて、いろ／＼の話をはなしして歩行あるきつゝあると、一丁ちやうばかり向ふの處ところで、獵人かりうどが切りに小鳥ことりに向つて銃じゆうを擬しつゝ狙ひながら近寄ちかよつて行くのを見た、乃て梅溪氏けいしの云ふには、今自分いまじぶんはアノ鳥とりを撃たれないやうにするからと云つて、獵師れふしに見へないやうに木蔭こかげに這入はいつて、つく／＼獵師れふしの方ほうを見てゐる、面白いことには獵師れふしが今、引金ひきかねを曳ひかうとすると、鳥とが一丁飛ちやうとんで他の樹ほかのきに移うつる、獵師れふしは一生懸命しやうけんめいになり汗あせを垂たらして又々近寄またちかよつて行くと、やがて狙ひも定まり、愈々いよいよ引き金ひきかねを曳ひかうとすると、前まへの通り又もや一二丁飛ちやうとんで外の樹ほかのきに移うつつて了ふ、かくて四五回くわいも獵師れふしは鳥とりを狙つては進んだが、トウ／＼撃なつことが出来なかつ

たので、梅溪氏の友人は變な顔して驚いたことがあつた。

▲然らばドウして此の僧侶が鳥を

▲逃げさせたのであつたかと云ふ

▲のに先づ斯うである

獵師が鳥を狙つてゐる時に、彼は一心不亂に念佛を唱へたのであつた、然うして彼は凡そ一心不亂に念佛を唱へるときは、彌陀の救ひ給はぬことは一事一物としてないと信じてゐたのである、要するに彼には金剛の信と云ふものがあつたのである、斯う云ふと皆さんは、念佛の爲に鳥の命が助かつたのだ、佛の力て助かつたのだと簡單に御考へになると、其れは所謂る迷信のやうであるが、併し其の念佛を唱へると云ふのは、自己の精神を統一する一つの方便であつて、其れと同時にアノ鳥を助けずには措かないと云ふ一心の力が鳥に通じて、獵師の頭にも變に響いて、然うして其の效を全からしめたのである、故に迷信でも

何でもないのである、要するに精神の力で出来たものである。

▲曹洞宗の禪僧に松野良英と云ふ

▲人があつて此の人は流石に本職

▲だけあつて宇内を家とし

天地を身としてゐた、さればかゝる知識名僧と語ること一夕なれば十年書を讀むに勝ると評判されてゐた人であつた、或る人が此の禪僧に就て精神上の談話をいそ／＼交換し合つた時に、此の禪僧の云ふには、吾輩は河邊の散歩の時に能く魚釣りをしてゐる人を見るが、かゝる時はキツと魚の釣れないやうにしてやる事が出来る、吾輩が釣らせまいと思へば必らず釣れないやうにしてやる、然うすると一日釣を垂れてゐたとて、不思議に一尾も釣れないものである、之れ皆な何れも精神作用の然らしむるところの異力であるが、或る寺の僧侶は池の中にある金魚を自由自在に動かして見せたことがある。

▲ されば兒雷也の墓の妖術でも或

▲ は白縫姫の蜘蛛の妖術でも何れ

▲ も精神練磨の産物である

精神の練磨が出来てゐると不思議な妖術のやうなものでも魔術のやうなものでも何でも出来るものである、昔の我邦の武士は随分強いものであつたが、之皆な精神の練磨が出来て、然うして其の結果として體育が能く發達してゐたからである、併し西洋にも昔は随分強い國も強い人もあつたのである、夫の人口に膾炙してゐるスバルタと云ふ邦では、少數の貴族が國權を握つてゐたので、其れをいつまでも自分等に握つてゐるには、ドウしても多數の平民や奴隸を御して行かねばならぬと云ふので、一種無類の憲法があつて、其れが爲にスバルタ人は非常に強いものになつてゐたのであつた、即ち其の憲法に依ると、生れた子が弱蟲であつて、逆も國家の役に立つ人間にはなれないと見ると、谷へ捨

て、野獸の餌食にして了つたと云ふ傳説さへあつた、思ふに其れほどまでに慘酷では無いので、弱蟲の子が生れると、貴族にはしないで、谷のあたりに住んでゐる平民に遣つて了つたことを云つたのであるが、斯ウ云ふ風にして貴族は強さうな子供許りを育て、其れが七歳になると、其の兒童達を親の手から離して國家が之れを教育することになつてゐる。

▲忍術でも劍術でも柔道でも凡て

▲精神と體育との産物に過ぎない

▲のでスパルタが能く證明する

スパルタの教育訓練は非常に嚴重のもので、多少は文字をも教へるが、精神と體育が重なるもので、其れから百般の武藝を教へるのである、然うして特に身體を鍛練することに非常に骨を折つた、寒い時でも暑い時でも、能く之れに耐へ、長い間、飲まず食はずにゐても、辛抱か出来るやうに、慣されてゐる

る、然うして國家の爲には死を見ることが歸するが如しと云ふ風に精神を養はれてゐた、此の兒童の教育に就ては實に面白い試験が行はれるのであつた、其れは兒童を神殿へ連れて行つて裸體にして背を鞭ち、泣き出さないで黙つて受けた鞭數をもつて、試験の成績を判断する標準にしてゐたやうなことがあつた、其の多くの兒童の中には飽くまで耐忍して、氣絶するまで聲を出さないものもあつたと傳へられてゐる。

▲實に之れを見てもスパルタの貴

▲族が強い人間を育てることに何

▲れだけ骨を折り

心を苦しめたかと云ふことが察せられる、然うしてスパルタの兒童は、教育される組々に依つて、其所に兄弟分と云ふやうな關係が出来る、其の兄弟分になつたものは、弟分の教育に就て萬事の世話をするのである、弟分に若し卑怯な

舉動でもあつたとすると、其の責任は兄分が引受けるのである、彼等の眠るところは共同の寄宿舎であつたが其のベットは、自分の川の岸へ行つて取つて来た葦を乾して、其の枯草で造つたものである、彼等には食物も充分に與へないで、勝手に食物を盗ませるのであつた、之れは敵陣などへ間諜に行くとき訓練の爲に許したのであるから、決して無暗に盗ませるのではない、若しも見つけられると、其の時こそ實に酷い目に會はされる又、食事の時には、國民一般の共同テーブルと云ふものがあつて、皆な其所で會食するのであるが、其の食物は、豚の肉を豚の血で煮たソップのやうなもので、大王から以下何れも同一無差別の粗食をしてゐたのである、併し兒童は大人と共に此のテーブルに就くことは出来ない、唯だ其の傍にゐて、勇敢の戦の話や狩の話や聞いて精神の修養をしたものである、然うしてスバルタの兒童は二十歳になると、初めて共同テーブル組へ入れるのである、其の時は組員の無名投票で承諾を求めて決定する、去れば平生が卑怯な舉動でもあつたと、却々此のテーブル組に入れない

此のテーブル組と云ふのが、スバルタの軍隊の單位になつてゐるので。

▲彼等は戦ひに臨んでは飽迄も互

▲ひに生死を共にする性質を發揮

▲することになつてゐた

其れてスバルタ國民は、此のテーブルに入ることになると、兵役に立ち亦た民會へ出席し、三十歳にして官吏になり士官となることが出来るのである、實に彼等は貴族とは云ひながら粗食にして粗衣で、常に武器を携へてゐなければならなかつたのである、然らして政府の命令がないのに、市街の外へ出ると、脱走したものと同様に、死刑に處せられるのであつた、又彼等の家を建築するにしても、第一に勝手に立派な家を造ることは許されないのであつた、又家の中に具へるものでも、自由には出来ないものである、若し金や銀の器具を持つてゐればドシ／＼罰せられたのである、當時のスバルタの政府は建築でも馬鹿に

質素しつそのものを獎勵しょうらいし、室内しつないでも詰つらぬ裝飾さうじやくを嫌きらつてゐた、結婚けつこんするにしても、政府せいふの許可きょかがなくては出来できないの、政府せいふは出来できるだけ結婚けつこんに干渉かんせふして、勇ま  
しい男おとこに賢かしこい女をんなを配偶はいぐうさせるやうに努力どりよくして、良よい兒この生うまれるやうに心こころを盡つし  
てゐた、結婚けつこんしても久ひさしく兒こが生うまなければ、國家こくかの役やくに立たたないと云いふので  
政府せいふは之これに離婚りこんを命めいじ、又また年としを老とるまで妻つめを娶めとらずに獨身どくしんでゐれば、不都合ふつごふ  
だと云いつて、政府せいふは之これを罰ばつしたのである、スバルタは又また、今日こんにちの日本にほん人じんなど  
の考かんがへられないやうに、金錢きんせんを卑いやしむ風ふうが養やしなはれてゐて、通用つうようする貨幣くわいはいは鐵てつの  
重おもいもので、多おほく貯たくはへたいと云いふ考かんがへを起おこさないやうに造つくられてあつた。

▲併しし流石りゅうせきのスパルタ人じんも、ユン

▲ナ生活せいかつでは一向かうに面白おもしろくないの

▲て慰なぐさみの爲ために

時々ときどきに大おほきな狩かりの會くわいをすることもあり、又また一つとところに集あつつて、歌うたを謠うたふ事こと

もあり、秀句の言ひ合ひをすることもあつた、彼等は寡言を貴び、電信の文句のやうに、出来るだけ簡單な文句で、云はんと欲するところの意味を充分に現はした秀句を愛した、今其の一例を云ふと、或るものが戰場に臨んで、劍が短かいと言つたのに對して、秀句に長じたものは直ちに之れに應じて、自分で長くせよと云ふことを以つてした、此の短い句に依つて、劍の短いのを厭するな勇奮して一足前に履み出せよ、然らば汝の劍は自ら長くなると云ふ意味が充分に現はれてゐる、又母が子に楯を與へて、汝は此の楯を持つて歸るか、或は此の楯に載せられて歸れと云つた、楯を持つて歸へるとは、勇奮して凱旋することとて、楯に載せられて歸るとは、名譽の戦死を遂げることである、此の句のうちの子を勇まし戒める意味が充分に籠つてゐる、總じてスバルタは斯う云ふ風で、其の軍隊の強い事は天下無比であつたのである、去れば當時のスバルタは忍術でも、劍術でも柔道のやうなものでも非常に發達してゐたのであつた、其れにしても凡ての武藝は、先づ以て粗衣粗食で大骨折をする覺悟が必要のも

のであり、之れが練達の要素となつてゐるものである。

▲以上の話を以て大概は忍術や精

▲神的武藝の要素は判つたであら

▲うと考へられる

乃て最後に臨んで忍術と云ふもの、要素を今少しく具體的に話して置うと思ふ、一體に人を欺くと云ふことは道徳上甚だよろしからぬことである、併しなから他の一方に於て我々は、他人を欺き、或は自ら欺かるゝことに興味を感じて、時に之れを喜ぶと云ふ心を持つてゐるものである、平凡なる正直や、詰らぬ眞實よりも、奇抜の虚偽、詐欺は却つて我々に好かれる傾向がある、悪黨が奸智を廻らしてゐる物語、若しくは探偵が之れにも劣らぬ巧妙なる手段を用ひて、之れと戦ふ物語などは、我々に非常なる愉快を與へることは何人でも否定はされまい、或は時に我々が悪商人の奸手段によつて詐欺にかゝると、自己の

損害を憤りつゝも、一方に於いては彼等の巧妙なる手段を歎賞する心の起ることを禁じ得ない、忍術のやうなものは即ち我々の此の精神状態を満足せしめて之に依つて快感を興ふるのである、忍術の起源は極めて古いものである、之れは支那や日本ばかりではない、古代の埃及には法術士と云ふものがあつた、古代の希臘や羅馬には忍術師が澤山あつて、能く市民を驚かしたものであつた、彼等は地下の暗い室で、種々の神様が見物人の前を通るのを見せたりした、之れは香の煙りの上に、金屬の凹鏡を以て反射した肖像を投ずるものであつた、或は又燃え易いもので、暗い壁の上に神様の姿を書いて、突然之れに火を點じて、同時に雷光雷鳴をさせるとして、石松を燃やし金屬を鳴らしたりしたさうである、總じて古來の宗教と云ふものは、殆ど悉く所謂の奇蹟と稱する忍術をやつたものである、例へば耶蘇が水上を徒歩したり、葡萄酒を急に作つたりしたことが、新約全書の中に書てある、若しも實際さう云ふ事があつたならば、其れは駭かに巧妙の忍術であつたに違ひない。

▲昔むかしの羅馬人ろいまじんは頗すこぶる忍術にんじゆつを好このんで

▲之これれを市中しちゆうで興行きゆうぎやうすることも澤たく

▲山さんあつたとの事ことである

其その後羅馬ごろいまの衰亡すいぼう期に入いつた、所謂いはゆる中世紀ちゆうせいの暗黒時代あんこくじだいにも、忍術にんじゆつの技藝ぎげいは滅亡めつぼうしないで、近世きんせいに入いると共に、更さらに復興ふくこして來たのである、特に當時たうじ著ししく勃興ぼつこうして來た科學くわがくの進歩しんぽを應用かうようして、種々しゆくの目覺めざましい手品てじなをやる人ひとが出來て來た、即ちすなはちからくり仕掛けじかけの人形にんぎやうが物を云いつたり、眼めを動うごかしたり、步行はかうしたりするものだの、或は鳥あひとりの羽はばたきをするものなどが盛さかんに作つくられたのである、其その中の巧たくみなものは甚はなはだ有名いうめいのものもあつて、當時たうじの王公貴族わうこうきぞくの間に珍ちん重ちゆうされて、珍品ちんぴんとして傳つたへられたものも少すくなくない、近世きんせいの始はじめの魔術師まじゆつしは、多おほくは伊太利いたりから出でてゐるので、十八世紀せいじちゆうの末頃すまごころに、伊太利いたりにビネツテイと云いふ人ひとが出でて、魔術界まじゆつかいに一新紀元しんきげんを造つくつたと云いはれてゐる、其その後に十九世紀せいじちゆうの

半頃なかごらになつて、千八百四十五年ねんに、有名いぢめいなるフランスのロベール、ウィダンと云ふ人ひとが、巴里パリに魔法宮殿まほうきうてんと云ふやうな名の大看板おほいかんばんを掲げて、魔術まじゆつの見世物みせものを開業かいげふし、最新さいしんの學理がくりを應用おうようして見事みごとに不思議ふしぎな技術ぎじゆつを示した爲ために、非常ひじやうな人氣にんきとなつて、此この人に依つて魔術界まじゆつかいは非常ひじやうの發展はつてんを來たしたのである、此この人は實じつに魔術界まじゆつかいの天才てんさいであつたので、其その以後いご世界各國せかいかくこくで行はれてゐる魔術まじゆつは此この人の系統けんとうを引ひいてゐないものはないと云はれてゐる、即ち此この人は今日こんにちの魔術まじゆつの祖人そじんとも云ふべき人ひとであつた、此このロベール、ウィダンは新らしい魔術まじゆつを多く工夫くふうした許ばかりではない、魔術師まじゆつしの衣服いふくや舞臺ぶたいの設備せつびにも大なる改良かいりやうを加へて世間せけんを驚おどろかしてゐる、之これまでの魔術師まじゆつしはテーブルにテーブル掛けかを掛けてテーブル下したを觀客くわんきゃくから見みえないやうに隠かくして了しまひ其そのテーブルの下したに助手じよしゆがゐる魔術まじゆつの手傳てづだひをしたものである、其それは觀客くわんきゃくの方ほうでも始めはじめから承知しょうちしてゐると云ふ光景くわうけいであつたのである、其それから魔術師まじゆつしの着きるところの長い上着うはぎは、其その種々しゆじゆの部分ぶぶんに物ものを隠かくしたり何かなにかするに便利べんりなやうに作つくつて置おいたのである、然しか

るにロベール、ウーダンは之等のことを悉く改良して了つた、即ちテーブルにはテーブル掛を廢し觀客の方からテーブルの下がよく見えるやうにして、テーブルの上に蠟燭を二本立て、置くことにした、又衣服も魔術師然たる誤魔化しの利く着物を一切止めて了つて、普通のイヴニングドレスを着て遣り始めた尙ほ彼は自ら魔術の練習をしたありさま、及び自分の子供に魔術を教へたありさまなどは、可なり詳しい記録となつて居り、學問的方面から見ても頗る面白いものになつてゐる。

▲併しながら魔術は如何にするも

▲一個の手品たるに過ぎないもの

▲である

けれども天下の英雄は之れを利用して大事業を完成する先驅たらしめてゐる要するに英雄が手品を利用すれば魔法となり、凡人が魔法を利用すれば手品と

なるのである、現代に於ける文豪福本日南翁は曩に英雄論を著はしてゐるが、其の中に英雄の籠罩術と題した項目がある、今其の要を摘録して、苟も英雄たらんと期する青年の爲に、前途を照らす探險燈となすべく左に之れを掲げて、本書の末尾を飾ることにする、夫れ昔より眞の英雄を以て神の權化であると考へる信念は、有史以後になつても依然として變りはない、故に英雄の此の世に出づる度毎に、必らず何かの靈異を傳へてゐることが、史上歴々として其の蹟を絶たずにゐる、亞歴山大王の誕生した日には、エフエーズと云ふところにあつた月の神様の神殿から猛火を發し、忽然として炎上したので、一府の人民相驚き且つ怖れたが、時の哲人へゼジャスと云ふもの、靜かに之を諭して云ふには、人々驚怖する勿れ、思ふに天神の英雄を此の世界に降さんとして、諸神をオリムピヤの幽宮に會したのである、されば月の神様も亦た入りて其の席に坐したので宮殿が留守番さへなくなつたので、火を發したのであらうと、然るに此の日には、亞歴山大王の父王、布立夫は戰鬪にも競技にも、會々二大捷報を

獲たことがあつたので、狂喜して云ふには、之れ誕兒が未來の運命を開拓する神瑞に違ひないと考へた。

▲然るに漢の高祖も亦た一身に神

▲異のあつた話を傳へてゐる歴史

▲を讀んで見ると

高祖の母、劉媪は嘗つて大澤の陂に息ひ、夢に神と交接した、此の時に雷電晦冥あり、其の夫太公が往つて視ると、蛟龍を雲の間に見た、既にして身ごもるありて、遂に高祖を産んだと云ふのである、高祖長じて泗水と云ふところの亭長となり、常に王媪武負に従ひて酒を買ひ、陶然として醉臥してゐる、武負や王媪が其の姿を見ると、時に龍が來てゐたと云ふことである、高祖亭長として縣の爲に囚徒を酈山に護送したら、囚徒の多くが道より逃亡した、高祖自ら度りて、斯くては先方に達する頃には、悉く逃亡し去るべし、寧ろ之れを心地

能く逃がしてやるに若かずと、或る夜豊の西澤と云ふところに至りて止つた、此所に於て高祖は、囚徒と共に酒を飲み、悉く解放して曰く、公等皆な去れ、吾れも亦た之れより去るべしと、囚徒の中にゐた壯士の面々は甚だ其の意氣に感じて、従を願ひ出づるもの十餘人、時は方に深更であつた、高祖酒を被り、澤中を歩行いてゐると、前に進んでゐた一人のものの報告して、前に大蛇ありて徑に當つてゐる、願くは此より他の途に引還さんと、高祖聽かずして曰く、壯士行くに何をか畏れん、前んで劔を抜き、撃つて其の蛇を兩斷して過ぎ去つたが、一壯夫あり、後れて蛇の横れる所に至つて見ると、一人の老嫗の其の傍に哭してゐるものがあつた、何を哭するやと問へば、人あり吉子を殺せり、故に哭すと云ふ、更に嫗の子は何れに殺されてゐるかと問へば、嫗曰く、吾子は白帝の子なり、仁して蛇となりて道に當る、今赤帝の子に斬らる、故に哭すと、壯士以爲らく、嫗妖言すと、將に之れを答たんとす、嫗忽ち見えずなりぬ、來りて之れを高祖に告ぐ、高祖心に喜びて、私に自負したりと云ふ。

▲ 秦の始皇帝常に曰く東南に天子

▲ の氣ありと乃ち東巡して之れを

▲ 厭したのである

高祖之れを畏れて芒碭山澤の間に隠る、呂后人と俱に求め、毎に其の所在に至れり、高祖怪んで之れを問へば、呂后の曰く、季の居る所の上には常に雲氣あり、故に従ひ至れるなりと、高祖心に又喜んでゐたと。按ずるに亞歷山大王は紀元前四世紀に現はれた人であるが、漢の高祖も亦ナ紀元前三世紀の人である、されば神人時代を距ること未だ遠からず、其の人の神異の傳説に圍繞されてゐるのも、未だ以て奇とするに足らないが、併し英雄を以て神子神孫となして、之れを人間以上に見るのは妙ではないか、然うして之れは東西の歴史を通じて滲つてゐるところがない、近くは我が豊太閤は天文六年に生れ、今より四百年前にもならないのに、國史は之れを傳へて、其の母、太陽の懷中に入ると

夢みて身ごもるあり、然うして此の英雄を産んだのであると云はれてゐる、故に字して日吉と云へりしとぞ、之れ當に傳記的記録に許りあるのではない、太閤が海内を統一したる後、兵を明韓に用ひる際に、當時スペインの藩屬であつたフィリッピンの太守に移牒し、其の入貢を促せる文中、亦た之れを徴すべきものがある、其れを見ると。

▲夫れ我國は百有餘年、群雄國を

▲争ひ、車書、軌文を同くせず、

▲予や誕生の時に際し

天下を治むべきの奇瑞ありしを以て、壯歲より國家を領し、十年を歴ずして彈丸黒子の地を遺さず、域中悉く統一せり、之れに繇りて、三韓、琉球、遠邦異域、塞を款いて來享せり、今や大明國を征せんと欲す、蓋し吾の爲す所に非ず、天の授くる所なり、其の國の如きは、未だ聘禮を通せず、故に先づ群卒を

して其の地を討たしめんと欲すと、コンナ按排で見ると、太閤自身も亦た其の誕生の奇瑞を認めてゐるのであつた、併しながら考へて見ると、之れ何れも風氣未發の時代に於ける英雄の籠罩術の存する所のものである、蓋し英雄に取りて幸なるは、英雄を以て神の權化なりと思つてゐる一般人の信念である、之れ此の信念は、神代以來より深く人の心の上に印象して、世を歴、時を易へるも尙ほ斯の生民の腦裏より去らないのである、故に大に天下に爲すことあらんと欲するものは、先づ人をして彼は神人である、人間以上である、到底人力の企て及ぶ所にあらずと信仰せしむるより便利の可い方法はないのである、若し一たび此の信仰を惹かば、統馭に、征服に、力を用ひること一半にして、功を收むること倍加するものである、顧ふに漢の高祖の如き芒碭山中夜行の際に、青大将の一匹やそこら斬り棄てたる事實はあるべし、後れて至れる一人が聽き得たる老嫗の赤帝白帝談は、恐らく漢の高祖が方寸の自作である、若し然うでないとしたならば、後れて至りし彼の一人、亦た此の際より山氣があつて、當時未

顯の英雄に豫め箔を附けたものであらうと思はれる。

▲其の他の雲龍五彩の譚り亦た又

▲た之れに類する話にして太閤の

▲時代は近いけれども

尙ほ此の故智を用ゐたものに違ひない、其の母の夢みたるところのもの、果して太陽であつたのであらうか、其の光り赫々として太陽のやうに、其の形ち團々として日輪のやうに、之れ恐らくは父親筑阿彌の禿げ頭であつたかも知れないのである、更に太閤の後、未だ百年を出でざるに、由井正雪、英雄過去の籠罩術を假りて、信を一世に博せんと欲し、豫め菊水の章旗を造りて、之れを淺間の山嶺に藏し、一日夢想に託して、之れを發掘し、自ら楠子の裔なりと稱し、信従するもの十百人にして、懷疑するもの千萬人、之れ僅かに百年の間で、國民の講學大に進んで、又餘りに假裝的の事を信せざりしに依る、従の成

らざりし、全く之れに原因したのである、北條早雲は吾戰國時代の一雄である、一日儒生を召して、黄石公の三略を講ぜしむ、儒生乃ち開卷第一に、主將の法は務めて英雄の心を攬すると誦するや、早雲聲に應じて曰く、我れ既に之れを得たり、復た説くこと勿れと、命じて其の講を停めしと云ふ、頼山陽先生之れを嘆稱して、足利氏其の綱維を墮して、權臣内に鬩ぎ、海内争亂す、然る所以のものは、天下の英雄各々其心を以て心と爲し、主將之れを收攬する能はざるからである、早雲早く此に見る所あり、以爲へらく、天下の事知る可きのみと、故に一劍の任に仗りて、天下を周流し、武を用ゐるの地を求め、一たび其地を得て、雲蒸龍變したのである、夫の兩上杉氏は百年の故家、財賦の富、兵馬の雄を以てして、早雲赤手之れを圖る、奚ぞ雖もて山を鑿つに異ならんや、乃ち能く戦へば勝ち、攻むれば取り、其死命を制せしは、果して何の恃む所ありて然りしか、英雄を結納し、其驩心を得るを以てのことである、兵寡くして、志一、地狭くして、力合す、同舟江を濟り、期せずして救ふが如し、此れを以て

敵に臨む、天下を横行すと雖も、難きこと無し、然るを況や兩上杉氏に於てをやと。

▲三略の首章に謂ふ所の主將とは

▲自から英雄の英雄を意義し次に

▲謂ふ所の英雄とは

蓋し英物の義である、されば我をして言はしむれば、英雄は務めて將士の心を攪ると云ふの一層適切なるを覺ゆるのである、古今の英雄の籠罩術は、何れも時に應じ世に處して、其の形體は百變すと雖も、要は唯だ此の一語に盡きん其の平素よりして衆心を收攬し、事あるに及びて操縦驅使するのは固より論のない話である、要するに大事に當りて衆の疑懼を釋き、人々をして勇躍して吾が用を爲さしむるが如き、亦た自ら箇中にありである、之れ風氣未發の時代に當り、東西の英雄が屢々神明の靈驗を稱し、三軍の志氣を強くして、寇を取り

敵に克ちたる史實に、歴々として載つてゐる、史記に云ふ、吳起の魏將となるや、士卒の最下なる者と衣食を同くし、臥するに席を設けず、行くに騎乗せず、親ら糧を裏贏し、士卒と勞苦を分つてゐたのである、卒に疽を病むものあり、吳起爲に之を吮つてやつたと云ふことである、卒の母が之を聞いて哭したと云ふ、或る人謂つて曰く、汝の子は卒である、將軍自ら其疽を吮ふに、何ぞ哭すること爲すや、母の曰く、然らず、往年吳公、其父を吮ふ、其父戰ひて踵を旋らさず、終に敵に死せり、吳公今又其子を吮ふ、妾其死所を知らず、之を以て哭すと、起は紀元前五世紀の人、故に史記の傳ふる所のもの、或は誇張、其實に過ぎてゐるかも知れない、然かも後世英雄の爲す所を見て、其の信に然るところを知る、豊臣氏の世に、一日太閤茗謙を開き、手に芳茗を點して諸將を饗す、大谷刑部少輔吉隆も亦た其の中にあり、茗法一椀の點茗を坐客に轉々し、衆口之を分啜味賞するを以て其儀とする、椀は傳へて吉隆の手に到る、吉隆承けて將に之を服せんとす、此の人平生惡疾あり、鼻淚垂れて椀底に落つ、飲み

盡して其痕を匿さん乎、茗法に背く、其まゝ直ちに他客に移さん乎、汚穢を奈  
 何せん、吉隆窮、其色に見はる、太閤之を瞥見し、徴還して曰く、刑部、其  
 腕の點茗甚だ妙ならず、我れ改め點して以て衆賓に供すべしと、命じて俄に刑  
 部の持てる腕を取り、一氣に嚙下し、更に清茗を點して、席上に遞致せしむ、  
 其間咄嗟、衆悟らず、實に太閤の意を加へて客を盛饗するものと爲せり、吉隆  
 感激、肺肝に銘せり、他年彼が豊家の社稷に殉せしものは、大端實に此際に發  
 してゐたのである、吾が乃木大將の軍にある、卒と兵食を同くし、臥するも亦  
 た其席を設けず、故に大將の臨むところ、沙上偶語を絶つと聞く、英雄は務め  
 て將士の心を攪る、自ら之れ英雄の襟度、術を弄するに非ずと雖も、術亦た托  
 して其の中にあると云ふべきである。

大正六年九月二十三日印刷  
大正六年九月二十八日發行

定價六拾錢

東京市淺草區北仲町五番地

著者 高田俊一郎

東京市芝區三田四國町一番地

發行者 土谷九次

東京市牛込區西五軒町五十二番地

印刷者 福山福太郎

東京市牛込區西五軒町五十二番地

印刷所 福山印刷製本所

東京市芝區三田四國町一番地

發行所 神田武藝研究會



複製不許

